

救済する者

愛すべからざる光

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼は使命を持ち『境界線上のホライゾン』の世界に来た。

そして彼は一人の少年と一人の少女に約束をしたのだ『生きとし生ける者を全て愛す
る』と誓いを立て。

だが、少女が事故で無くなるも彼は彼を貫いた。彼女と約束したもう一つの約束の為
に。

そして十年という年月が経ち、彼は武藏で生きている。
更新は不定期です。

目次

第九話 月下の終わり

番外編

錢湯

1

180

165

主人公設定	第一話	第二話	第三話	第四話	第五話	第六話	第七話	第八話	黄金
10	4	1	148	121	97	83	56	45	

プロローグ

何もない真っ白な空間に見た目からして高級感あるテーブルと王様が座つていそうな椅子が二つあり、男女が一人ずつ座つていた。

男性の方は金色の髪が腰まで伸びており髪と同様に金色の瞳を持ち、顔は非常に男前でイケメンと言った方がいいだろう。白スーツに黒マントという姿ではあるが非常に似合つていると言つていいだろう。

もう一人の女性は彼と同様に金色の髪と金色の瞳であり、常にニコニコしていて見るからに優しいそうな性格でおつとりしていると分かる。白いドレスを着て優雅にティーカップに紅茶を入れて飲んでいた。何時の間にティーカップが置いてあったのか紅茶があつたのかは全く分からなかつた。

「魔法の無駄遣いですね、母さん^{かあ}」

彼は女性に言つた「母さん」とつまりこの二人は親子なのだ。外見的に似ていてのがあつたのでなんとなくは分かつていた。

「そういうノアだつてお茶を飲んでいるじゃない？」

彼の名前はノアというらしい。ノアの手にはグラスの中に緑茶が入つていた。

「それはそうとこうして一人だけになるのは久しぶりですね」

「そうだよね、親子水入らずだね！」

のほほんとしている母親にノアは笑みを浮かべていた。自分の親は何時まで経つても変わつてはいないということが嬉しくて顔に出ていたのだ。

「それで今回はどうしたんですか？」

何時もは別々に仕事をしておりこうやつて話ををする機会はあんまり無かつたのでノアは不思議がつっていたのだ。軽い話なら手紙や色々な方法での伝え方があるのだが。

「お母さんね～、ちょっと救つて欲しい世界が出来たからノアに頼まれて欲しいのよ～」と言つて彼女は手を軽く横に振つた。何か分からぬ動作であるが何かをしたのは事実だ。

「なるほどね、母さんの頼みなら断れないね」

笑みを浮かべて了承するノア。ノアは親が好きだ、自分の事を育ててくれて教育してくれて尊敬もしている。そんな人からのお願いを断れるわけないのだ。

「うん、ありがとう、流石は私の息子です」

彼女の方も嬉しいそうに綺麗な笑みを浮かべていた。自分の息子が疑うことなく素直に返事してくれたことが嬉しかったのだ。世界を救つてくれなんて言われたら多少は抵抗もあるし、疑問も思うだろうにノアは何も聞かずには了承したのだ。

「私は色々な世界に行つてみたかつたからこれも良い経験になるだろうね」

ノアは今までに色々な世界に行き、旅をして色々な経験を積んでいるのだ。人との触れ合い、戦闘の技能、国の政治など数多くをノアは体験してきているのだ。

「だが、仕事の事とかは大丈夫なのか？」

「私達の神の仕事は大切だからね、心配しなくてもちやんとやつておいちやうから！」

ノアの心配は気にしなくてよくなつた。自分に割り振られていた仕事をどうするのか気になつていたが全て解決していたのだ。

「自分が思つた道を進んでくれていいのよ、後の心配なんてしなくていいのよ、全て私が責任を持つから、それが親の在り方であると私は思つてゐるからね」

胸を張つていう親に対して笑つて応えるノアであつた。自分の親がこの人で良かつたと内心で感謝しているのであつた。

主人公設定

能力値

名前：ノア

種族：人間

性別：男性

身長：180cm

体重：70kg

外見：金色の髪、金色の瞳、色白で引き締まつた顔立ち

武装：一通り使える

役職：総長連合 副長兼全補佐

※全補佐というのはどこの役職でもやれるものです。

筋力：A

耐久：B+

敏捷：B

幸運：A

内燃抨氣：A+++

宝具：EX

武装

聖約・運命の神槍

・各国が保有する神格武装、聖譜武装、大罪武装の原点であり、帝が保有する三つの神器の原点でもある。原点であることから作られた他の武装とは違い、出力も威力も桁違いに強い。

分に使える代物である。
・現在のノアではこの槍の全開の力を使えず、四割程度しか使えないが、それでも十分に使える。

・槍の中にはノアがこれまで作り、触つてきた武装が数多の数あり、自由に使える。
・この槍の維持には相当な抨氣を使う為にあまり多用はできない。

勝利すべき黄金の剣

- ・英国が持つ”E・X・カリバーン”の原点である
- ・幅20m、厚さ2mほどの空を渡る光の大剣となり衝撃波で対象を碎く出力と威力を持つ。

・使用者がノアだと出力と威力が異常にあがる。

・現在英國にある物とは違い、縛りがなく、連発可能。

約束された勝利の剣

- ・エクスカリバー真名解放時の技。
- ・所有者の拝気を光へと変換し、その光を斬撃として放出する。
- ・拝気の量によつて威力が変わり、最小でも一つの町が蒸発し、最大で国家が滅びる。
- ・拝気消費がすこぶる悪い（ノアが唯一使っているが相当な消費をする）
- ・この技を知つているのは今のところはノアだけである（現英國を治める”妖精女王”ですら一発放てば三日間は倒れてしまう）

保有スキル

※○は主人公の全力解放時（全力全開時）

直感：B+++

- ・戦闘時、つねに自身にとつて最適な展開を「感じ取る」能力。第六感も働きもはや未来予知に近い。また、視覚・聴覚への妨害を半減させる効果がある。

黄金律：A

- ・人生においてどれほどお金が付いて回るかという宿命を指す。
- ・ノアは一生金に困ることはなく、大富豪でも十分やっていくれる。

カリスマ：A+（EX）

- ・軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力。団体戦闘に置いて自軍の能力を向上させる稀有な才能。
- ・年上や敵に気に入られたり、対応が少し甘くなったりする。
- ・解放時は周りの人達がひれ伏し、屈伏してしまう。

道具作成：B（EX）

- ・抨氣で作成可能。
- ・加護が付いた武装に付属品など御守りなどの作製が可能。
- ・ノアが作った物を着けていたり、置いていたりすると運が上がる。

博愛者：B+（EX）

- ・差別せず平等に対応できる効果があり、女性に対しては常に解放状態であり、勝手に寄つてくる。
- ・嫌われてない限り全人種とすぐに仲良くなれ、女性には非常に強力であり、会った瞬間に好意レベルまで仲良くなれる。

術式

形成

- ・槍の中に存在している武装を取り出す時に使用する術式。

・前回使用した術式などは引き継がれ、効果が継続していく。

聖約・運命の神槍の中にある術式

傲慢

・「所有者が誇りを保つ限り、当人の力を無敵にする」という効果が全力で発動してお
り、自身の信念が揺らがない限り効果は消えない。

・この術を使われると無敵でいられるが、味方から来る加護なども受け付けない。
・槍を出している状態では使えないの、あまり多用はしない。

怠惰

・槍先から放たれる「搔き峠り」で全てを削ぎ落とす。
・術発動後に自身でON・OFFができる能力が付く。相手の弱点を知れる。

第一話　主人公

武蔵・青梅

準バハムート級の航空都市艦群『武蔵』にある青梅に一人の青年が目を覚ました。晴れた、青い空が窓から見える。ずっと外を眺めていたい気持ちになるがそれをぐつと堪えて隣に寝ている人物を起こしに掛かる。

「直政^{なおまさ}起きて、朝だよ」

隣で一緒に眠っていた女性は布団が一枚だけで服は着てなかつた。彼も着ていなかつたのは言うまでもないだろう。

「もう朝かい、早いもんさね」

眠そうにしながら隣にいる彼の肩に頭を乗せて、もたれかかりながら話をしていた。布団を胸元まで持つて来て胸を隠している直政は色氣があつて欲情しそうになる。

「やつぱりノアは温かいさね」

肩にもたれながら全身でノアに甘えてくる彼女の行為に対しても彼女の肩に手を伸ばしてぎゅっと自分の方に寄せた。そんな彼女からは女性特有のとても良い匂い

がしてくるので、もつとこの雰囲気を味わっていたいものだが。

「もつと直政の温もりを味わっていたいけど行かなくちゃ」

そう言うとベットから立ち、服を着て、部屋を後にしようとする。

「ちゃんと朝食用意しておくから直政はゆっくりしていいってね」

最後に一言をいうと直政の頭を撫でてから部屋を出て行つた。

「全く、私もノアの前だと普通の女の子になつてしまふさね」

ベットの横の机に置いてある煙管キャセルを取り、窓を見ながら吸い始めた。煙管の中身はメンソールです。

「ホライゾンが亡くなつた事故で三河に運ばれたトーリとノアはしばらくしてトーリだけ戻つてきて、その四年後にノアが戻つてきた、四年間、何をしていたかを聞いても何も答えてくれない『来るべき時に話す』の一点張りさね」

ノアが何か隠しているのはクラスの皆が知っている事で、最初の頃は気になつて皆聞いていたけど、ノアが一向に口を開いてくれなかつたから黙るしかなかつたようだ。

「思い出すだけで笑いが込み上げてくるさね」

直政は煙管を咥えながら笑い出した。

「四年後に帰つてきた時に感動より先に攻撃が先だつたさね」

ノアが帰つてきて、最初に喜美が氣絶してクラス全員で総攻撃したそうだ。四年間顔

を見せなかつた罪と連絡して来なかつた罪と本物か確かめる為に総力をあげて攻撃したようだ。手加減無しの攻撃に対してもノアは息一つ乱さずに全て受け流し、皆の前に立つて『ただいま』と言つたそうだ。その日は祭りのように皆で賑わつた。

武藏艦内・後悔通り

武藏にある八艦の一つ奥多摩の右舷の中央通りにある俗称『後悔通り』という。

その一角にある石碑の前にノアともう一人女性が立つていた。その女性は黒い長髪をヘッドドレスで結わえたメイド服のような服を着込んだ自動人形と呼ばれるものだ。人形に魂を宿す人工異族であり、感情が無いという特徴を持つ。

「毎朝同じ時間に此処に来られるのですね——以上」

「そういう武藏さんだつて、毎朝私と一緒に此処にいますよね」

武藏と呼ばれた女性はこの準バハムート級『武藏』の艦長であり、戦時の時の防衛を担つている人もある。

「私は毎朝掃除をしていますので此処で——以上」

「そして私も掃除をしていますよ」

二人は石碑を掃除して、終わると花を置き、手を合わせて祈りを捧げた。人通りが少ないこの場所は現在は風の音しか聞こえず静かであった。

「もうすぐ三河ですか……」

「ステルス航行に入ればすぐに三河に着きます——以上」

祈りも済ませて二人は歩きながら後悔通りを出ようとしていた。二人の歩いている姿はノアの容姿もあり、武蔵はまるで従者のような存在にも見える。ノアの容姿は金色の髪が腰まで伸びており髪と同様に金色の瞳を持ち、白と黒を強調した学生服を着ていた。

「ホライゾンが亡くなつて十年が過ぎたのか、早いもんだよな」

後悔通りを出て、ちょっととしたところで空を見上げて、昔の事を思い出してた。ノアの横顔を見た武蔵は何故だか理解できない行動をしていた。そつとノアの手を掴んでいたのだ。

「奥多摩が教導院にある図書室で寂しい時には手を握ると良いという事を記憶していましたので——以上」

恥ずかしそうにもせすノアの手を握りながら話していく武蔵に対してノアは一言「あ

りがとう」と言つて、十分間の間を彼女と手を繋ぎながら空を見上げていた。

武蔵アリアダスト教導院の門と校舎の間にある一本の橋に生徒と教師が居た。時報のチャイムが終了して、一人の女性が声を出した。

「三年梅組集合——。いい?」

黒い軽装甲型のジャージを着て、背中には金属を柄とした長剣を装備した女性が立つていた。

「では——、これより体育の授業を始めます」

彼女は生徒達の前に立ち言つた。

「ルールは簡単よ——先生、これから品川の先にあるヤクザの事務所まで、ちょっとヤクザ殴りに行つて来るから全速力で全員付いてくるように。そつから先は実技ね」

生徒達から「えつ?」という声が聞こえる。急に殴り込みに行くと言われたら流石に驚く。

「——ハイ、返事は？」
「J u d」

返答、了解の意を示す言葉を皆が返した。

それと同時に手が上がる。“会計”という腕章を受けた長身の男性が言つた。
「教師オリオトライ、——体育とヤクザとどのような関係があるのですか、金ですか？」
「ほらシロ君、先生、最近一軒家を割り当てられて喜んで、ノア君と酒盛りしてヤクザに
邪魔されて、暴れて色々壊してちやつて、教員課の人にはマジ叱られたから、腹いせに報
復だと思うよ」

長身の男性の名前は、シロシロ・ベルトニーというその隣にいる女性は“会計補佐”
という腕章を付けて、ハイディ・オーゲザヴァラーという名前だ。二人共、武藏アリア
ダスト教導院『生徒会』の“会計”的役職である。

「報復じゃないわよー。先生、ただ単にノアとイチャイチャしていたのを邪魔された仕
返しを百倍返しにして返したいだけよー！」

「地獄絵図が生まれるで御座るーー！」
「一区画が吹き飛ぶぞーー！」

帽子をかぶった男性と半竜が叫んでいるが気にしない。それぞれ腕章を着けている。
「五月蠅いわよ、点蔵、ウルキアガの二人、今此処でぶつ叩くわよー！」

オリオトライは背の長剣を鞘ごと脇に抱えた。鞘の表面にはブランド名である『IZUMO』と書かれていた。その動作に点蔵、ウルキアガは体をびくつとさせて硬直させていた。

「休んでるの誰かいる？」ミリアム・ポークウは仕方ないとして、東は今日の昼に戻つてくるみたいだし、後は？」

問い合わせに周囲がそれぞれを見渡して確認していた。

すると黒い三角帽の少女、『第三特務 マルゴット・ナイト』という腕章を着けた金髪の少女が口を開く。彼女の背中には金の六枚の翼がある。

「ナイちゃんが見る限り、セージュンとソーチョーとノーチャンがいないかな」

その声に隣に居た黒翼の少女、『第四特務 マルガ・ナルゼ』が首を傾げた。

「正純は小等部の講師をしに多摩に行つてゐるし、午後から酒井学長とノアと一緒に三河に送りに行くから、自由出席のはずだけど、トーリは知らないわ、ノアは私とマルゴットの朝食作りに来て何処か行つちやつたから分からなーいわ」

クラス全員がなるほどと納得している。正純は分かつたとしてノアと総長の行動は訳が分からぬ。

「ああ、ノアは連絡來てるからいいわよ『今度一緒に飲みに行きますので遅刻にしないでください。奢ります。宜しく！』ってね、ということでトーリだけ遅刻ね」

「ちよつと待てツ!?」と皆は一緒になつて声をあげた。

「目の前で隠蔽いんぺいがされたで御座るよー!!」

「こうも堂々と言うとは恐れ入る!」

「先生隠す氣ないでしようー」

点蔵、ウルキアガ、マルゴットはツツコミを入れていた。他の面々も領きながら同じ事を思つたに違いない。

「そんなことをいちいち気にしないの! じゃあ、トーリの行方知つている人いる」

その言葉に皆がある一人の女性を見た。

そこに立つているのは茶色のウェーブヘアの少女だ。彼女は腕を組み、口に弓の笑みを浮かべていた。

「フフ、皆、うちの愚弟のトーリの事が知りたいのね、そんなに聞きたい、聞きたい——でも教えないわ」

ええつと疑問の声を作る皆に対して彼女は意味ありげに頷いた。

「朝八時過ぎにノアが起こしてくれた時にはいなかつたのよ、私の朝食も作らずに、でもノアが作つてくれたから大丈夫なんだけどーー!」

最後の方はハイテンションになつているこの人は “あおい葵・喜美” という先程から総長やらトーリ言われている人の姉である。

「じゃ、トーリは遅刻かな？——生徒会長で総長なのにコレはいかんねー！」

彼女の台詞に皆が力ない笑いを作った。そして対するオリオトライもそんな皆に対しても苦笑を返す。

「極東の歴史は後で教室で勉強するとして、実技いくわよ！」

女教師オリオトライが瞬間的に長剣を脇から持つて構えた。その行動に瞬間的に梅組のメンバー動いた。

「いいねえ、戦闘系技能を持つてるなら、今ので来ないとね」

告げる。

「先生、攻撃を“通す”ではなく、“当てる”でいいので御座るな？」

発言したのは“第一特務 点蔵・クロスユナイト”という腕章を付けた少年だ。彼は帽子を目深にかぶつたまま隣にいる“第二特務 キヨナリ・ウルキアガ”という航空系半竜の男性を見て、同じ事を思っていたのか頷き合っていた。

「戦闘系は細かいわねえ、それでいいわよ」

「成程。——では先生のパーティでどこか触つたり揉んだりしたら減点されるところありますか？ またはボーナスポイント出るようなこととか？」

「あはは、授業始まる前に死にたいのかしら二人は？」

その言葉の直後に土下座をする二人が居た。

「第一に私に触れていいのはノアだけよ！」

先生の発言に女性陣は何やらソワソワしており、男性人は悔しがっている者や知らんような顔をしている者など色々といる。

そんなこんなでオリオトライは――

「――んじや」

オリオトライがそういうと跳んでいた。背後へ跳躍して、階段の一番下まで降りていった。すると、跳躍した所から「追えー」という声が聞こえて梅組が動き始めた。

「さてと――」

方向転換して走り出したオリオトライは後悔通りを走っていた。そして走っているうちにとある一角に石碑があつた。

『一六三八年 少女 ホライゾン・Aの冥福を祈つて 武蔵住人一同』

《武蔵アリアダスト教導院：学生代表内訳》

『総長連合』

・ 総長 : 葵・トーリ

・ 副長 : ノア

(副長兼全部署補佐)

- ・第一特務：点蔵・クロスユナイト（諜報）
- ・第二特務：キヨナリ・ウルキアガ（裁判）
- ・第三特務：マルゴット・ナイト（実働）
- ・第四特務：マルガ・ナルゼ
- ・第五特務：ネイト・ミツツダイラ（実働）
- ・第六特務：直政

（実働）

『生徒会』

- ・会長 : 葵・トーリ
- ・副会長 : 本多・正純
- ・会計 : シロジロ・ベルトニー
- ・会計補佐 : ハイディ・オーゲザヴァアラー
- ・書記 : トウーサン・ネシンバラ

※全部署補佐というのはどこの役職でもやれる役職である。

第二話 授業という名の模擬戦

右舷二番艦、多摩表層部に店を構えるパン屋兼軽食屋『青雷亭』^{ブルーサンダーティ}という場所にとある人物がいる。

「あはは、クラスの女の子達の朝食作ったのに自分のは作つてなくて食べれなかつたつてかい、あははー」

頭巾に前掛けをした中年の女性が手を叩きながら盛大に笑つてゐる。頭巾をかぶつた女性はこの店の青雷亭の店主『葵^{あおい}・善鬼^{よしき}』といふ。

「恥ずかしながら、でも直政もマルゴットもナルゼも喜んでくれたので、私的には納得してますから」

彼女とは反対側に座つてゐる男性はノアだ。今頃になつて朝食を食べてゐるようだ。

「ノア様は完璧超人に見えて抜けているのですね」

ノアの横に座つてゐる女性が言う。彼女は長い銀髪をした自動人形の少女。ノアの隣でお茶を入れながらノアに話しかけてゐる。彼女の名前は『P—01s』といふ。

「そうそう、ノアは見た目も中身も完璧にみえて、何処かすっぽ抜けてゐるんだよ、あははー」

P—01sの返答に店主が返し、まだ笑っているようだ。そんな光景をノアは苦笑いで誤魔化してご飯を食べていた。

「J ud・武藏様から色々とノア様の噂は聞いておりますが、『完全無欠』、『好男子』、など色々二つ名があるようですが？」

「P—01、ノアは確かに掃除、洗濯、料理、面倒見の良さ、器量、さりげない優しさ、他にも色々とあるけど、そういう所が全部合わさって、『完全無欠』、なんて呼ばれるし、それにさりげない優しさが乙女心をくすぐるなんて喜美の奴が言っていたよ」

P—01sの疑問に店主が答えてくれた。店主が言つた言葉にP—01sは手をポンつと叩きながら納得しており、本人であるノアは苦笑いを浮かべて頬をかいている。「皆さん、私を評価し過ぎなのですよ。私はやりたい事をやつているんですからね」

箸を置いて、店主とP—01sの方を向きながら胸に手を当てて言うノアを見て、店主は、また笑い出してお腹を押させていた。P—01sの方はじ一つとノアの事を見ながら何かを思つてゐるようだ。

「P—01s? 何かあつた?」

ノアの方を見ながら動かなくなつてゐるP—01sに気付いたノアは言う。

「――ご飯粒が付いていますよ」

そう言うとノアの口に付いていたご飯粒を取り、自分の口に含んだ。その行動に驚

く、店主とノア、二人が疑問を浮かべ、首を傾けるP—01s。

「そんな処理の仕方を誰に教わったんだいP—01s?」

店主の言つた事にノアも領きながらP—01sに答えを求めた。

「J ud. 本で読んだので、男性の方はこういうのをやつて頂くと、喜ぶと書いてあつたので」

二人はその事を聞いて内心で一緒の事を思う。『教育に悪いのでその本を捨てようと。』

「ノア様、教導院の方へは行かなくて大丈夫なのですか?」

「真喜子さんには連絡してあるから大丈夫だよ、途中から合流するつもり」

まだ残つているご飯を食べて一人と談笑して、ご飯を食べ終わつた。

「ご馳走様でした」

「お粗末さまでした」

ノアが両手を合わせてお礼を言つて店主が答えてくれた。食器を片付ける為に奥に行つてしまつた店主。そしてそつとP—01sが暖かいお茶を持つてくれていた。
どうぞ、と言いながら出してくれたお茶を、ありがとうございます、と言いながら受け取るノア。「——衝撃音が近付いてきます。そろそろ梅組の皆様が来るようです」

P—01sが言葉に出して言つてくれた事に領きながら、席を立ち、P—01sの前

に立つ。

「ちよつと手を貸してくれないか？」

ノアの言葉を理解できずに首を傾げながら手をノアの方へ差し出したP—01s。その手を両手で掴んだノアは何かを思いつつ手を優しく包んだ。

「——暖かい」

まるで割れ物を大事に持っているようにP—01sの手を包んでいるノアはその手から暖かみを味わっていた。P—01sはノアのこの行動を理解できていなかつた。自分は何をされて、何をすればいいのか、分からぬといふ答えしか彼女の内心では解らないことだらけだつた。

「ごめんね、ありがとう」

手を離してP—01sの頭をさりげなく撫でてから出口に向かっていくノアを止める者が居た。

「P—01s？」

服の袖を少し摘みながらノアの顔を見ながら彼女は言う。

「……今度来ましたらもう一度、手を握ってくれませんか？」

P—01sがそんな事を言うとは思つていなかつたので面を喰らつたノアであつたがすぐに持ち直し、笑顔で了承して店を後にした。

その後、店主が声を掛けて来るまでP—O1sはノアに掴まれていた手をじーっと見ていた。

梅組一同とオリオトライが授業という名のデスゲームをしている。場所は教導院から遠退き、多摩の商店街通りに来ていた。

「——アイスが」

再三の攻撃も受け流され、攻撃した本人、『浅間智』、が叫んでいた。悔しそうにペルソナの手の上で膝を着いている。

浅間の近くに居る点蔵も悔しそうにしており、彼も攻撃したのだが、受け流されて一撃を与える事ができなかつたのだ。だが、ここで諦める訳にもいかないので追いかける事に専念し走っている。

「ほらほら、貴方達の力はそんなものなのかしら」

後ろ向きで走りながら梅組の生徒に呼びかけるオリオトライは楽しそうに満面の笑みを浮かべていた。昔と比べて成長していることを思いながら、ついつい笑みがこぼれてしまっていた。

自分の言葉で梅組の生徒の走るペースが上がったのを見て、満足そうに笑みを浮かべ、自分も前を向く為に方向転換しようとしたのだが、オリオトライは何かを感じていた自分の後ろに誰かいるという気配だ。

「遅れていませんでした」

オリオトライが前を向くとそこには申し訳なさそうに頭を下げているノアがいる。オリオトライはその光景を見て律儀にちゃんと謝つてきた事にも驚きつつ、何時の間に背後を取られたのかという驚きの方が大きかった。油断はしていなかつたのに全く気配を感じなかつたのだ。

「別に謝らなくていいわよ。連絡してくれたんだし、トーリなんて連絡無しよ。ほら、走つて走つて！」

立ち止っているノアの肩を掴んで強制的に走らせるオリオトライに体勢を崩しかけてしまつたノアであつたが、立て直してオリオトライの後を追いかけて行く。走りながら説明を聞き、やる気が出てきたようだ。

「一撃入れればいいんですね？」

「そうそう、ノアにとつては余裕かもしれないけどね」

オリオトライの言葉を聞いて、一気に加速してオリオトライに近づいて拳を振るうノア。オリオトライも鞘付きの長剣で真正面から来た攻撃を受け流して、逆に自分はその受け流した勢いを利用して反撃に転じていた。回転しながら来る斬撃をノアはしゃがんで回避して、今度は脚を払おうとした。

「バレバレよ」

脚を払う瞬間にオリオトライに読まれていた為にジャンプして避けられてしまい、隙を見せてしまったノア。その隙を見逃すことなく長剣を振り下ろすオリオトライ。

「先生のその行動も予想していたよ」

自身の手を着いて長剣の攻撃を脚で受け止めたのだ。止められた事に驚きもせず笑みを浮かべて楽しそうにしているオリオトライはすかさず後ろに後退しながら体勢を整える。

「でも私がヤクザの事務所に着いたら逃げるわ」

オリオトライは屋根と屋根を飛びながら品川方面へ向かつて行く。逃がすつもりもないのですぐにその後を追うノア。

そして少し後ろに居た梅組のメンバーは先程の戦闘を見て、やはり凄いと感心していた。

「ノア殿はリアルアマゾネス相手に一步も退かんで御座るな」「拙僧には追い込んでいるようにも見えたが」

点蔵、ウルキアガの二人が言う。前方にいるノアに追いつこうと走る。「絶対にノア君には一撃入れて貰つてアイスの恨みを晴らしてもらつて、一緒にアイスを食べに行きましょう!」

「あ、あ、あさまさん、く、口から、よ、欲望が漏れてる」

浅間と鈴もそれぞれ言う。

「流石は我が主様です。すぐに加勢に参ります」

「相変わらず、ミトはノアに夢中なことさね」

ネイトや直政もそれぞれ感想を述べていた。

「ガツちやん、ノーちゃんと一緒に先生に仕掛けよう!」

「そうね、二人だけでも行けそうだけど、ノアが居れば確実にイケるわね!」

ナルゼ、マルゴットの二人は飛んでるので先程の戦闘がよく見えていた。そして皆より先にノアと合流してオリオトライに仕掛けようとしている。

あれから再び何人かが追いつき仕掛けて、何人かが一撃を入れるのに成功している。ノアがオリオトライに仕掛けている時に不意に仕掛けて一撃を決めたのだ。今のところではノア、浅間、マルゴット、ナルゼの四人が一撃を入れていて。

「(さつきまで無傷だつたのにノアをが合流してからボロボロにされたわ)」

オリオトライは内心で愚痴りながら、自分の生徒達が成長しているのに喜んでいた。実際にニヤニヤしながら走っているのが証拠だ。

「(ノアを中心に動けばこのクラスヤバいわね)」

途中参戦したノアが入ってきて、急に勢いを増したのだ。誰かが牽制し、その牽制も足りなかつたらまた誰かが加わり、一人では決して仕掛けてはいかなくなり、常に三人で仕掛けてその三人の中にはノアが必ず入っているのだ。オリオトライを釘付けにしている間に堪らず残りの二人が仕掛けるという手順でオリオトライに四回も攻撃を通したのだ。

「(ここは一つ策を仕掛けちやいますか)」

点蔵とウルキアガとノアの攻撃を捌きながら、内心で色々考えた結果、まずは要であるノアを分断することを考え付いたオリオトライ。

「ちょっとノア、一人の女性を痛めつけて傷物きずものにしてどうしてくれるのよ!?」

「傷物——」

オリオトライの言葉、『傷物』、という単語に反応したノアは追い駆けていた脚を止めてしまい、その場で止まってしまった。梅組の全員が思つた事は一緒だつた。またやりやがつたあの女、という気持ちであつた。

「……私が一人の女性を傷付けてしまつたというのか、私は女性を幸せにできないといふのか、私の存在理由とは一体なんなんだ、私はどうなつてもいいんだ、彼女達が幸せであれば……、私は誰一人も救えないというのか……死ぬしかない」

その場で膝を付いて、空を見上げながら、独り言をつぶやいている。

ノアのトラウマスイッチが入つてしまつたようだ。

彼は女性限定で、しかも向こうが傷ついたり、泣かれたりした時にそれを直接言われた場合にネガティブ思考に入つてしまうのだ。言われない限り正常なのだが、本人に言われた場合のみくる発作だ。そして親しければ親しいほど、そのダメージは大きい。

『ちょっとタンマ!!』

ノアが膝を付いてブツブツ言つてゐる側に梅組全員が集まつていた。

「ノアさん、元気出してよ！ 私まだ先生に一撃入れていないんだよ！」

「ノ、ノアくん、げんきだして、わたしたちにはあなたがひつようなの！」

アデーレ、鈴がの目の前で必死に励ましていた。

「全く、完璧超人に見えるのに弱点があるなんてね（でもこれがギャップつヤツなのかしら？）」

「でもそんなノーチちゃんに惚れてしまつているガツちゃんとナイちゃんがいるのでした

」

ナルゼ、マルゴットがノアの後ろに立つて両肩に手を置いて慰めている。ナルゼはノアの事を観察して慰め、マルゴットは自分達が惚れてる事を堂々と言つていた。

「心配しなくとも私達が付いているさね、だから安心してノアは私達の前に立つておくんさね」

「そうですとも、我が主様は堂々としていただきだけで我々は安心するのです。我らに道を示して下さい！」

直政、ミツツダイラの二人はノアの前に来て励ましていた。直政はノアの顔を強制的に自分の方に向けさせ、目と目を合わせて言う。ミツツダイラもノアの前で膝を着き言つていた。

「あ、あれ、私達の出番ないので？」

「バカね、私達はこの後よ、ノアが疲れている所に私達二人が接近して、胸を当てて癒してあげるのよー！ そしてそのまま押し倒されて色々とーー」

浅間、喜美がノアの背後で何やら話していた。浅間は考えを喜美に相談していて、喜美は授業が終わってからの事を考えているようだ。話がどんどん進むにつれて腕を組みながら悶え始めている。

「ノア殿でも女性には勝てないで御座る」

「拙僧も“強い女性”には勝てないぞ」

点蔵、ウルキアガもノアの近くで心配そうにしながら女性の事について話していた。
「ノアの奴が動けなくなつたらお金が動かないではないか！ ノアのいる所には必ず儲けがあるのに！」

「シロ君、こういう時もお金の事を考えているなんて素敵！」

シロジロ、ハイディの二人も近くにはいるが全然違う事を考え方つていた。

「（ノアの奴が動けなきや、弟妹達が泣いちまうな）」

「（完璧な人でも弱点は無いとね）」

ノリキ、ネシンバラも近くに寄りながら心配しているようだ。ネシンバラの考えは心配しているのか微妙であるが。

「小生しょうせいが思うにウチのクラスの女性陣はベタ惚れですな」

「……」

「カレーどうですか！」

「御広敷君が言つている事は誰もが知つてゐるよ、ねえ、ネンジ君」

「J u d. そんな事は承知済みよ！」

御広敷、ペルソナ、ハツサン、健児、ネンジの五人も近くに寄り話をしていた。
ノアの周りにはすぐに梅組の全員が集まつていた。彼はそれほど信頼されて、愛されている。

「……すいません、トラウマが再発したみたいで」

先程の落ち込みようからどうにか回復して気持ちの整理ができたようだ。マイナス
オーラ全快であつたが皆の声を聞いて立ち直れたようだ。先程と違ひ目に輝きが戻り、
何時ものノアに戻つている。

そして全員が前方にいるオリオトライに目を向けていた。律儀にもオリオトライも
走るのを止めて、待つてくれた。

「（あらあら、これは逆に逆鱗に触れちゃつたかしら？）」

多数の殺氣を感じながらオリオトライは走り出した。だが、走り出した瞬間に元いた
場所に矢と槍が突き刺さつていた。浅間の矢とアデーレの槍をミトツダイラが投げた
ようだ。

『追えー！』

誰かの号令で全員が一斉に動き出した。行動は早く何人かはオリオトライに追いつき仕掛けている。怒涛の勢いで攻める梅組メンバーに対して冷や汗を流しながら捌くオリオトライ。

中央全艦の艦首付近・展望台

再開した授業を遠くから見守る視線があつた。

早朝にノアと一緒に居た自動人形“武藏”と煙管を咥えた中年過ぎの男性“酒井忠次”である。酒井は武蔵アリアダスト教導院の学長である。

「相変らずノアの奴はモテるな」

煙管を咥えながら笑っている酒井は先のノアのトラウマ現場を見ていたようだ。酒井が何時もノアを見掛けた時は周りには常に女性がいるな、と考えながら口にしてい

た。

「……」

それに対する武藏は沈黙を続けていた。先程まで重力制御を操作しながら展望台を掃除していた自動の箒が全部停止していた。

「——武藏さん？ もしかして機嫌悪い？」

「いえ、そんな事はありません——以上」

「ちょ！ そう言つて俺の足を踏まないで！」

酒井が武藏の異変に気付いたので指摘してみると、ちゃんとした返答が返つて来たが、逆に足を思いつきり踏まれていた。酒井は何時も武藏といることが多いので少しの変化に気付いたようだ。

「ごめんごめんって、俺が悪かつたから！」

「酒井学長が何を言つているのか、理解できないのですが——以上」

「うわあー、さらに重くなつたよ」

酒井が謝つているものの、武藏は顔色一つ変えずに冷静に踏んでいる足にさらに力を入れている。

「ギブギブ、武藏さんがノアの事が心配で一杯なのは分かつたから解放して！」

「先程から酒井学長が何を言つているか、全く理解できません——以上」

「げつ、次は箒が飛んできた、ぐはッ！」

酒井は自分で墓穴を掘っていた。武蔵は酒井の言葉に対し片手を振り、重力制御で箒を酒井にぶつけた。酒井は足を押さえられていた為に動けずに箒の直撃を受けてしまい氣絶してしまった。

「“浅草”、“品川”、今日はノア様の大好物な料理を御馳走してあげましょう。いいですかね？——以上」

「J u d」

武蔵が言うと二つ鳥居型の表示枠が宙に現れた。武蔵と同じ自動人形の“浅草”と“品川”だ。二人は返事をして閉じた。

「では、私も仕事に戻ります——以上」

見下ろして見ていた梅組の授業を見ながら重力制御で箒を操りながら掃除を再開した武蔵であつた。

「さてと殴りこみたいけど……」

オリオトライの言葉は途中で止まつた。周りを見て言う。

「私とノアが一番だけど、すぐに皆も着たようね」

「先生は梅組生徒の評価を多少変えた方がいいですよ」

オリオトライとノアが交戦しながら同時にヤクザ事務所前に着いていた。その後すぐ梅組の皆も、走り着いていた。

「そうね、アナタ達タフになつたわね」

それぞれ呼吸を整えて疲れているのが伺えるが誰も倒れたりはしていないようだ。

逆にオリオトライとノアは息一つ乱していない。

「先生に言われても嬉しくありません！」

「くそお、あとちょっとで御座つたのに！」

「何で、何で、私が一撃も決められなかつたなんて！」

浅間、点蔵、ミトツダイラが何やら騒いでいる。自分達が必死になつて仕掛けたのに対して余裕がある態度にツッコミを入れていた。点蔵とミトツダイラは自分達が一撃を入れられなかつた事を悔やみながら、余裕でいるオリオトライに腹をたてているようだ。地面上手をついて悔しそうにしているが、他にも決められなかつた者達もいるのに二人は特に落ち込んでいた。

「点数をあげる人は、ノア、浅間、マルゴット、ナルゼ、ノリキの五人よ、いいわね！」

『J u d』

全員が了承。再開した授業でノリキがオリオトライに一撃を決め、一人増え、そしてノアは追加で五撃、浅間は一撃をさらに決めていた。他のメンバーも頑張っていたが、オリオトライに受け流され、避けられたりして対応され、一撃を決められなかつた。だが、点藏とミトツダイラはもう少しの所までいつたのだが、先にオリオトライが逃げおうせてしまい、間に合わなかつたのだ。

「じゃあ殴り込みに行くけど、ノア行つてきて」

「私ですか？」

オリオトライの言葉に頭に？を浮かべるノア。他のメンバーも分からなかつた。

「先生、皆のせいで疲れたので代理にノアを選びました。教師の命令です！」

「権力を使つて強制的にやりやがつたこの教師！」

「しかもノアが女性からの頼みを断れないのを知つていてさね！」

ウルキアガと直政がツツコミを入れた。他の生徒も同じように頷いていた。

「うるさいわね、ねえ、ノアお願ひ」

オリオトライが真正面からノアに抱きついてお願ひしてきた。ノアもノアでその行動を素直に受け入れてされるがままにさせていた。

「なつ！ 貴女は授業中ですのに何をやつているのですか!?」

「このリアルアマゾネス撃ち抜きますよ」

ミトツダイラと浅間がそれぞれ戦闘態勢に入つて、一触触発になりかけていた。ミトツダイラも自分の武器である、神格武装『銀十字』を出して装備し、浅間も弓を構えた。

「智もミトも怒らないでよ。先生の頼みなら断れないですね」

手で一人を止めて、オリオトライの抱擁を解きノアはヤクザの事務所の玄関まで来て

……

「失礼——しますッ!!」

普通はノックをするもんだろうがノアは拳を放ち、玄関を吹き飛ばして開けるという荒業をやつてのけた。ノアと少し離れた所で見ていた梅組メンバーは啞然としている者や青ざめている者や苦笑いを浮かべて口元が引きつっている者や様々な反応をしている者が居たが、オリオトライは大爆笑して眺めていた。

「覚悟はいいかな？」

『ぎゃあーー』

ノアが乗り込んで行つた事務所からは叫び声が聞こえ、その場にいた人達は事務所に向かつて合掌をした。武蔵の副長が制裁をするのだから無事で済むわけがない。

「——あれ？ おいおいおいおい、皆揃つて合掌して何やつてんだよ？」

合掌していると背後から声が聞こえ、振り返ると茶色の髪に、笑つたような目。崩して着込んだ鎧型の長ラン型制服に、左の脇には紙袋を抱えていた青年が居た。周りに居る誰かが言つた。

「トーリ „不可能男“ 葵……」

この人物こそ総長兼生徒会長の „葵・トーリ“ その人だ。

「さてと、君は、先生の授業をサボつて何をやつているのかな？」

「ええ？ 先生マジで俺の戦利品に興味あんのかよ！」

トーリは脇に抱えていた紙袋に包まれていた物を先生に見せた。

「今日発売のされたR元服のエロゲ „ぬるはちつ！“。これ超泣かせるらしくて初回限定が朝から行列で大変だつたんだよな！」

トーリが熱くエロゲについて語っているがオリオトライは半目でトーリの肩に手を置いた。

「あのさ君、先生が何を言いたいか解る？」

「何言つてんだよ先生！ 先生の言いたい事なんて分かるに決まつてるじゃん！」

トーリはそういうとオリオトライの両胸に手を伸ばして揉もうとした。

「——トーリ、流石にそれは見逃せないな」

オリオトライとトーリの間に割つて入るようにノアが入ってきて、トーリの手を掴んで止めていた。

「おお！ ノア居たのかよ！」

「事務所に殴り込んでいたからね、ほれ！」

掴んでいたトーリの手を放し、ノアは事務所の方を指差して殴り込みの後を見せていた。トーリも事務所の玄関が派手に壊されてるのに笑みを浮かべて親指を立てて笑っていた。

「そうそう、皆、ちょっと聞いてくれよ。前々から考えていたんだけどさあ……」

一息の後、トーリはこう切り出した。

「——明日、俺、コクろうと思うわ」

いきなりのトーリの告白予告に皆が同じ反応をした。ただ一人を除いて。

「悔いが残らないように頑張るのですよ」

「おう！ 任しとけ！」

ノアの言葉に拳を握り締めて気合を入れたトーリ。

『待つたー！』

ノアとトーリ以外の面々は二人の会話に疑問を持たずにはいられなかつた。

「ちよつとノア殿、納得するのが早過ぎで御座るよ!?」

「こんな展開も話的にはアリかな……」

「愚弟、いきなり現れて熱心にエロゲの話をして、いきなりコクるなんて。まさか画面の向こうにいるんだつたらコンセントにチンコ突っ込んで痺れて死ぬといいわ！ 素敵！」 賢い姉に説明しなさい』

「ノア×トーリ……イケるわね。ネタ貰い！」

点蔵、ネシンバラ、喜美、ナルゼや他の面々もツツコミを入れながら状況を把握しようとしていた。ノアの把握力が異常すぎる。

「で、誰に告白するんだ？」

ノアが代表して切り出した。

「——ホライゾンだよ」

人の名前を確かに言つた。だが——

「馬鹿ね、十年前に、あの子は亡くなつたのよ」

「解つてるよ、ただ、そのことから、逃げねえ」

トーリは笑みのまま、もう一度皆を見渡した。

「コクつた後、きっと皆に迷惑かける。俺、何も出来ねえしな。俺の尻拭いつてか——世界に喧嘩売るような話だもんな」

髪の毛を搔きながら皆に話を言うトーリ。

「じゃあ愚弟、今日は色々と準備の日よね、そして今日が最後の普通の日?」

「そうだな、トーリが笑顔で言つた。

「じゃあ喜美、盛大にやるか!!」

「うふ、そうね。盛大にやる為に買い物に行きましょウノア!!」

トーリの返事を聞くとノアが皆の前に出て提案してきた。それに乗じて喜美もノアの腕に抱きついていた。

「ノアと姉ちゃん、俺より盛り上がつてるってどういうわけよ!」

トーリが二人にツッコミを入れている時であった。彼の肩を後ろから叩く人物が居た。

「なんだよ先生!・姉ちゃんとノアにツッコミを入れてくれるのか!?」

トーリの言つた事に首を横に振り、否定したオリオトライは言う。

「遅刻してきて、話を聞かずに自分の世界に入り込んで、あまつさえ——私の胸を触ろう

としたこの馬鹿をどう懲らしめ様かと考えているのよ」

次の瞬間オリオトライの右足がトーリの頸に当たり、空に高く飛び上がつた。

飛び上がったトーリに追撃するオリオトライは空中にいるトーリの元まで跳躍し、回し蹴りでヤクザ事務所にゴールを決めた。

そして誰かが言つた――コンボが繋がつた！

第三話 階段上の変人達

武藏中央後艦・奥多摩にあるアリアダスト教導院の正面橋架きょうか、正面側から降りて行く階段の上に制服姿の影が幾つかある。

トーリを中心とした梅組メンバーだ。いない人達もいる正純、ミリアム、東はない、ネイトは酒井学長と行動を共にしているので欠席。

他の皆は階段に座りながらそれぞれリラックスしていた。階段の壁に寄り掛かりながら休んでいる直政、浅間に膝枕されながら寝ているノア、その浅間も幸せそうな笑みを浮かべてノアの頭を撫でていた。

「本日の話題は“葵君の告白を成功させるゾ会議”というこで。書記である僕ネシンバラの提供でお送り致します」

書記であるネシンバラが宙に表示した鳥居型の鍵盤を叩きながら言う。

トーリは周りを見渡して一息ついた後に傍らに座る忍者帽子の点蔵を見て言う。

「なあテンゾー、告白ってどうやんの？ オマエ、回数だけはこなしてるだろ？」

「い、今自分、色々と否定されたで御座るな！？ そうで御座るな！？」

「いいから話してみ？」

急に立つなり慌てふためく点蔵を一言で落ち着かせて、点蔵が腕を組んで頷いていた。

「ぶつちやけ、いきなりコクるのは贊同できんと御座るな。誰だつて心の準備があり申すし——」

「点蔵、恋というのは急なモノなんですよ。私だつて家の扉を開けて出てこうとしたら見知らぬ数人の女性に『服従します』なんて言われて膝を着いて待つていた時は驚いてしまつたよ」

浅間の膝枕で休んでいたノアが膝枕をされながら言い出した。何を言い出したんだと驚愕の皆に対しても無かつたことのように膝枕を堪能していた。

「ちょ!? ちょっとコクリよりか遙かに上をいつているで御座るが!?

「こ、これは、エロゲの話なのか!?」

「いや、ノア殿ならありえる話だとこのネンジ思う!」

点蔵、ウルキアガ、ネンジの三人が言う。他の男性陣も驚いている様子だ。

「そういうえば機関部の女子が何人かそんな事を言つていた様な気がするさね」

「私もそういえば漫画部の女の子達が『黄金の王子様に仕えるメイド達』、『王子様の雌奴隸』とかいうネタを考えて、私に提出してきたわよ」

「ナイちゃんも運送業仲間の女の子達が片時も離さずにノーちゃんの写真を持っていた

よ

直政、ナルゼ、マルゴットの三人も言う。女性陣は聞き覚えがあつたのか、ああ、と
いう一言で頷いていた。

「うふ、ノア、聞くのも野暮だけど、その子達はモチロン『愛した』素晴らしいわ
「ちょっと喜美!? 嫉妬とかしないんですか? 「あら、アンタ、ノアに抱かれてケーキよ
り甘く甘えている分際でよく言うわね」なな、何を言つているんですか!?

否定はしませんが私がノア君の胸板に顔を埋めて抱きついたりしますが――」

喜美がノアの隣まで移動して浅間の膝の上で寝ているノアの頬を優しく撫でながら
聞き、その行為を受けながらノアも答えた。

二人の会話を聞いていた浅間は顔を真っ赤にしながら喜美に言うが逆に言い返され
ていた。そして最後は妄想の世界に入り込んでしまい、両手を頬に当てて、イヤイヤし
ながら悶えていた。

「おいおい! 僕のコクリの話からノアの武勇伝になつているぜ!」

トーリの話から逸れてしまつたのでネシンバラが咳払いして一度、落ち着かせる。

「ん、んつ! ノア君が『フラグ乱立』スキルをカンストしているのは、今は置いてお
いて、葵君の告白を成功させるゾ会議に話を戻すよ」

「では、ここは一つ『手紙作戦』など如何で御座ろう?」

と、点蔵が懐から手帳とペンを取り出す。

「簡単で御座る。——前もって、伝えることを書いておいて、コクの代わりにそれを手紙にして手渡すで御座るよ」

うむ、と点蔵は頷く。

「フフフ愚弟、だつたらアンタの心の中にある彼女いいところを書いてみなさい」「ん~、と悩みながら手帳に書いていくトーリ。

・顔がかなり好みで上手く言葉に出来ない

・しゃがむとエプロン裾からインナーがパンツみたいに覗けて上手く言葉に出来ない
・ウエストから尻のあたりのラインが抜群で上手く言葉に出来ない

「——ず、随分と具体的で御座るな！」

「待て待て、……お主、おっぱい県民なのに相手の胸に対する言及が無いだろう」

点蔵の後にウルキアガの言葉に、皆、はつとしてトーリを見る。

周囲の下校中の生徒達も、今の言葉に対して身の動きを止めていた。ヒソヒソと声が聞こえ「オツパイソムリエの総長が……」「毎日連呼してるので好きな女にはヘタレ……？」などなど色々言われて、注目を浴びているトーリ。

「——オッパイは、揉んでみないと、解らない」「無差別に上の句を読むなよ!!」

皆のツツコミに、眉をひそめたトーリ。

「フフフ、つまり、——オパーアイに対してはいい加減は出来ないのね?」

喜美は、トーリの背中から抱きついて握り拳を掲げて、トーリも、ああ、と答えた。

「俺、こう見えても眞面目だから! 適当なことは言わないぜ!」

「正直者で良いことだ」

姉と弟は二人揃つて握り拳を掲げていた。その光景をノアは慈愛の表情で見ていたが、内容が内容だけに他の皆は、おい、とツツコミを入れていた。

「ここは一つ試すのはどうかしら?」

「試す? 何をですか?」

喜美が言つたことにアデーレが聞いた。他の皆も分かつていないのでいる。

「——近似(きんじ)のオペーイオーナーに頼んで揉ませてもらうに決まっているじゃない!」

喜美の言葉と同時に、橋の上及び下の校庭において、半径三十メートルのいる人々が退避した。男女共に走つて行く者や小走りで去つて行く。

「姉ちゃんすげえな、頭いいけど馬鹿じやねえの!?」

「あはは、それはいいや、やつてみたら?」

「姉ちゃんに便乗して、ノアも言いやがったし!?」

トーリはツッコミをするがノアも喜美側に悪乗りする。

盛り上がつて いる最中だが、声を掛けてくる人物がいた。

「——こんなとこに座り込んで何をしてるんですの?」

声が聞こえた方を振り向くと、校舎の入り口から二つの影がやつてくる。

「酒井学長……」

皆の呼ぶ声に、よう、と手を擧げる。そしてもう一人、酒井の横を歩いているのは、銀色の大振りな前髪と、黄色の鋭い瞳を持つ娘。後ろ髪は円を卷いた大きな束になつている。

「ミトツダイラ。酒井学長と三河に降りるの?」

その問いかけに彼女は首を小さく横に振り。

「私じやありませんわ。酒井学長と主様です。私は三河に降りる際に必要な証書を作つていましたの」

そういうことだね、と酒井が言う。

「お~いノア、もう時間だぞ」

「もうそんな時間ですか……ありがとう智」

酒井の言葉に膝枕されていたノアは起き上がりつて、浅間の頭を撫でてお礼を言う。こ

ちらこそ、と浅間が返答していた。

「ノア、三河の流通を見てきてくれないか」

「J u d、そういうえば今年の三河は物資の購入が全く無いようだね、売りに徹しているみたいだし」

シロジロの言葉にノアは宙に鳥居型の表示枠を出して、シロジロの方へ飛ばした。その表示の中には三河からの物資の情報がグラフで表示されていた。

「こんな詳細な情報を何処から拾つてきた!？」

「武藏さんから色々と聞いたんだよ。それをグラフに纏めただけだよ、欲しいならあげる」

ノアに近付いて肩を押さえて揺らすシロジロを軽くあしらうように回避するノア。

「——で、風の噂で聞いたんだが、トーリ、お前さんが告白するとか何とか。……そんな危険の及ぶ相手ってのは——」

「ホライゾンだよ」

言つた台詞に、皆が沈黙し、酒井はわずかに空を見た。

「……あれ、お前さんはやつぱ、そう思うのか?」

「ああ、とトーリが言う。

「何も出来ねえ俺だけど、一緒に居てくれねえかなあ、つて」

「そうか、と酒井と言つた。空に、煙草を吐くように、そうか、とまた言う。

「トーリが決心したのですから、私達は見守りましようよ。酒井学長」

「そうだな、まあ、頑張れ。俺はこれから三河だから。行くぞノア」

トーリの横を通り過ぎる酒井はノアの肩を軽く叩いて階段を下りていく。
「J u d・トーリ、正純と合流するから夜八時に幽霊探しつて言つておくよ」

「サンキュー！」

酒井に続くように着いていくノアは一度、振り返つてトーリに言う。

「それとミト、ちょっとこっちに来て」

「私ですか？」

手招きしてミトツダイラを目の前まで呼ぶノア。

「トーリが抱えている問題を解決できるのは君しかいないんだ。だから協力してくれないか？」

「あ、主様が言うならこのネイト・ミトツダイラ、何だつていたしますわ（ああく、吐息が当たっていますわ）」

ミトツダイラの両肩を押さえて真剣な表情で言うノアにミトツダイラは、頬を赤く染めて答える。

「じゃあ今はこれで許してね、ご褒美だよ」

「へっ？」

ミトツダイラが反応するより早くノアは、ミトツダイラの唇を奪っていた。

「んう？　あ、あるじさ……むぐつ！」

「ん、ちゅう、んむ、んぐう……」

ノアはミトツダイラの顎を持ち上げてキスをした。突然の口付けに、驚くミトツダイラだつたが、すぐに受け入れてしまい、求めてしまつていた。無駄に静かになつていてこの場には二人のキス音が響く。

周りの皆は、顔を真つ赤にしている者、自分の手で目を隠しているが指の間から見ている者、煙管落とす者、頬に手を当ててうつとりしている者、逆の方向を見てるフリをしてチラチラとキス現場を見る者など他多数。

「——じゃあ行くね、後の事はヨロシクね」

キスが終わり、手を振りながら酒井学長の後を付いて行くノアに対して啞然とする一同。キスをされたミトツダイラは唇を手で触りながら、先程のことを思い出しているのか、うつとりしている。

「おいおい、ノアの奴、見せつけて行きやがつたぞ！」

「エロゲの再現で御座るな」

「あの流れからするに、次はベットシーンだつたな」

トーリ、点蔵、ウルキアガの三人が言う。

「昼間から盛んね、私ならあのまま押し倒してると」

「ノアにしては序の口ね」

「ノーチやん大胆だな！」

「ナルゼにマルゴットも喜美の発言にツッコミを入れてくださいよ！ というか皆、不潔です！ 「お前が言うな！！」 えっ？！」

喜美、ナルゼ、マルゴット、浅間の四人が言う。

「あがが、ノアさんは相変らず何を考えているのか解りません」

「い、い、イヤらしかつた、です」

「はあ、たく、何をやつてるさねノア」

アデーレ、鈴、直政の三人も言う。

そんな中でトーリはミトツダイラの前に移動する。

「うつし、——じやネイト、一丁やろうか？」

その問いかけに、まずは自分の息を整え、心の中を整理するミトツダイラ。

「我が主の為に、この私が何でもいたしますわ！」

「じゃ、遠慮無く」

言葉と共に、ミトツダイラは胸に感触を得た。

——え？

酒井学長の横を歩くノア。

「ずいぶんと見せつけてくれちゃって」

「いえ、それほどでもありません」

「いやいや、褒めてないからな!?」

酒井とノアは話をしながら歩いて行く。

歩いて行く内に教導院の方から物凄い音が聞こえた。馬鹿あーー、と叫ぶ声と共に、何かが壊れる音が聞こえ、ノアは笑い、酒井は溜め息をついて歩いていた。

第四話 町中の哲学者達

酒井とノアが教導院から歩き出して、早五分、正純とも合流し、山道の輸送の中継基地である関所の道上を三人で歩いていた。

三人は、ときには首を傾げつつ言葉をかわし、山道を行く。

「——って話で、トーリが明日、コクるんだってなノア」

「そうですね。夜にも教導院の方で騒ぐから、正純も来れるよね？」

酒井とノアが、口端に笑みを作り、誘っていた。

「私は副会長です！ ノアもノアで、何で止めないんだ！」

「総長兼生徒会長の提案ですからね、簡単には断れなかつたのですよ（私がトーリのやることに対しても、否定したことないんですね、実際）」

「大丈夫だつて。連中と同類だつて見られるだけだよ」

「じゃあ駄目じやないですか。——大体、総長兼生徒会長がいきなりコクるとか公言してみたり教導院で騒ぐとか……」

困つたように言う正純に対し、酒井は笑い、ノアも同じように笑つている。

「正純は、鈴さんと同じで梅組のストッパーだから、私は相当正純のことと信頼している

だけどな」

「そんな役割いらん!!」

ノアの発言に正純は、バシツ、と手でツツコミを入れていた。その光景を見た酒井はさらに笑っている。

「先日だつて、多摩表層部の方で「ミトのことでしょう?」その事件だ」

「そういえば、あつたねえ、でも、あれさ」

酒井は横目で、ノアと正純のことを見る。ノアはニコニコしており、正純は軽く引くを彼は確認し。

「——あの食通貴族、ミトツダイラ家が欲しくてネイトに言い寄つてたの、知つてた?」

「……は?」

エグザゴン・プランセーズ

「六護式仏蘭西からかは解らないけどさ、襲名狙つてミトツダイラ家と婚姻関係を結ぼうとしていてさ、俺とノアはネイトから相談されてたんだよ」

じやあ、と正純が眉を歪めた。

「あの騒ぎは、酒井学長の手引きで?」

「おいおいおいおい疑うなよ。俺じやないぞ。君の隣でニコニコしている奴が犯人だよ」

「ええー、の、ノア、お前だつたのか!」

正純は思わず一步引いて、ノアから距離をとる。正純の反応に笑みを崩さずに答えるノア。

「はい、そうですよ。ミトがとても困っていたので、ついつい」

「ついついで、あんなことされてたまるかッ!?」

「誰も被害を受けずに済んだのですから、いいではないですか？」

「あの後、取引先の人が「副長怖い副長怖い副長怖い」とブツブツ言いながら、病院に運ばれたんだぞ！」

笑みを浮かべたまま、自分は悪くないです、と答えるノアに正純は声をあげて怒つていた。あの後どれほど私が苦労したか、と小さく呟いた言葉をノアは聞き逃さなかった。

「何だか迷惑掛けたみたいだから、明日の朝・昼・晩は私が料理を作るよ。許してくれる？」

「……それでいい」

「（何だかんだで、正純君も餌付けされてるみたいだね）」

急に機嫌が良くなつた正純は、スキップでもしそうなぐらい嬉しそうにしていた。酒井はその光景を見て苦笑いでいる。

「で、あの食通貴族をどうやって懲らしめたんだ？」

「一対一で、話をしただけですよ、ミトもその場に居ましたけど……（言えない言えない、相手の目の前で、ミトに色々させて発情させてたなんて……）」

「ありやりや、お前さん、討論も強いから、精神的に追い込んだんだろう」

酒井が煙草を吹かしながら、事件の全貌を聞き、呆れていた。正純も同じように呆れており、困ったもんだ、と呟く。

「そういえば気付いているか、ノア」

「ええ。やはり変ですね」

二人は急に真剣な表情をしたので、正純は驚いていた。先程までふざけあつていた人が、急に雰囲気が変わったからだ。

「シロジロに頼まれていたけど、やつぱり今回は変です」

「何が変なんだ？」

鳥居型の端末を弄りながら言うノアに、正純は聞く。

「——ほとんど空の貨車ばかり、って、シロジロから聞いたんだけど、意味解る？」 正純

君

「それは……」

はつとして、正純が声を上げた。

「武蔵への荷はあつても、武蔵からの荷が無い、つてことですよね。つまり、三河からの

買い付け発注が少ないとということですね」

「正解、いつもはもつと、こつちからの荷もあるんですけどね」

正純の答えにノアが答えた。

「——まるで、三河が死ぬ前に形見分けして、自らを世間から隔絶しようとしてるみたいですね」

「おいおい、おつかない」と言うなよ。ただでさえ三河は鎖国状態で、交流不許可とか言つて武藏とも距離を取つてるくらいなんだからさ。だがまあ……」

よく解らんねえ、と酒井が領いたときだ。

不意に、上から影が来た。頭上。雲のような、大きな影が空を渡つていく。

「あれは——、船か」

「三人が見上げた船影は一つではない。

〔K. P. A. I t a l i a 所属 教皇総長インノケンティウス所有するヨルムンガンド級ガレー „栄光丸“ 護衛はトレス・エスパニア三征西班牙の警護隊だね〕

ええ、と正純が口を開いた。

〔P. A. O d a ロイスモイ・オブロ大罪武装の開発要求ですね〕

酒井とノアは頷き、ノアが口を開く。

「世界のパワーバランスの一端を担う、この世界に八つしかない都市破壊級個人武装。七大罪の原盤とされる人間の八想念をモチーフした武装で、使用者は暗に『八大魔王』と呼ばれていますね」

「流石だね、と酒井が言い、続けるノア。

【暴 食・淫蕩・強欲・悲嘆・憤怒・嫌気・虚栄・驕り】

アーケディア ケノドクシア ハイペリフニア

六世紀にグレゴリウス一世によつて七つにまとまります。虚栄は驕りに含まれ、悲嘆と嫌気は怠惰にまとまつて、さらに嫉妬が追加されて七つです」

お見事、と酒井が言う。正純も領きながら感心していた。

「そして十年前に元信公が聖譜所有国に八つの大罪武装を送りました」

【暴 食・淫蕩・強欲・悲嘆・憤怒・嫌気・虚栄・驕り】

マ

・ 淫蕩 : K. P. A. Italia

・ 強欲 : 英国

イギリス

・ 悲嘆 : トレス・エスパニア

トリニティ

・ 憎怒 : 上越露西亚

オルジイ

・ 嫌気 : 三征西班牙

アーチェ

・ 虚栄 : 六護式仏蘭西

ケノドクシア

・ 駕り : 六護式仏蘭西

ハイペリフニア

「三征西班牙と六護式仏蘭西が二つ持っていますが、これは八大罪が七大罪になるとき、まとめられた積みに対応しています。つまり、出力が低めの設定です。——出力が低めといつても、三征西班牙が大罪武装を持ち込み新大陸にいる機獣達を全滅にまで追い込んだという話を聞きます。神格武装や聖譜顕装と同等ですが、自由度が違いますね」

と言い終わると『栄光丸』を見て、

「今回教皇総長がわざわざ来るのは、七大罪の『嫉妬』を作らせようとしているって噂です」

ふーん、と酒井が反応し、両手を組んで考え事をしている正純。

「あの教皇総長はいいとして、二人共、大罪武装につきものの噂って、知ってる?」「つきものの噂……ですか?」

J ud. J ud. J ud.、と酒井が三回頷いた。

「——大罪武装は、人間を部品にしている、ということですよね?」

「おいおい、おじさんが答えようとしたことを、つたく
髪を搔きながら、J ud.、と答える酒井。

「でも噂だからね、噂」

「……」

酒井が笑いながら正純に言う。その横で真剣な表情を浮かべて『栄光丸』の方を見

て いる ノア が いる。

「……お、 もう 着い ちやつたか」
話しながら 三 人が 歩い て いたら 関所 に 着いた。

「さてと 正純 君、 ここまで でいいよ。 あとは 戻つて 遊んで いいから」

「あ、 はい。 あと、 酒井 学長、 松平 四天王 だつたら 知つて いるか と 思い ます が、 もし、 忠勝 公の 息女 に あつたら よろしく 言つて おいて 下さい。 私、 昔に 同級生 だつた こと ありま すから」

「忠勝さん の 息女 と いうと、 二代 です ね」

「ノア 知つて いるのか？」

「はい。 武 の 方 の 本多 です ね」

「ああ、 いた なあ。 …… 今日 来る かな？ まあ、 会つたら 言つて おくわ」

「有り難う 御座 い ます、 と 言いつつ。

「この 後 は、 調べ よう と 思つて いる こと が ある ので、 そ れ に 専念 し ます」

「へえ、 何を？」

「“後悔 通り” です。 それ を 調べると 皆の こと が 解る から、 つて 言わ れて」

正純 は 内心 で 思う。 これ も 一つの 踏み込み だ な、 と。

すると 眼前、 酒井 が 一 つの 反応 を 示した。

笑つたのだ。隣にいるノアも笑みを浮かべて嬉しそうにしている。

……え？

いきなりの笑い声に正純は言葉を失つていると、酒井は笑みの会釀を送つてくる。

「いいねえ。——トーリは明日の告白というイベントを控え、皆もその祝いやら何やらの準備をするだろうし、夜には教導院でお祭り騒ぎだ。そして東宮だった東君はその身分と力を捨て、今日から武蔵での生活を再開し、三河は殿先生の指示で今夜、花火や祭だと言う。どれもこれもバラバラなようでいて、……新しい動きと、祝いの動きだ」

一息の後に、酒井が言葉を続けた。

「『後悔通り』を知ることが、正純君の新しい動きになるといいね」

一息。

「俺にもまだまだ解らないことは多いけど、それでもまあ、……正純君が俺や、ノア、トーリ達の側に来ることを、俺は祈つてるよ」

酒井はそう言いながら関所へ歩いて行く。その後ろ姿を正純は見つめていた。すると肩を誰かに触られ、振り返るとノアが笑みを浮かべて正純に言う。

「正純の一歩は確かに一歩だよ、今日は付き合えないけど頑張ってね」

正純の頭を一度だけ撫で、酒井の後を追いかけていくノア。関所を越える前に、一度だけ正純の方を見て、手を振りながら関所の向こうへ行つてしまつた。

「きっと私が悩んでいたことも解っていたんだろうな。ほんのしたことでも気遣いがで
きるのか……優しいな」

正純はそう言うと来た道を戻りながら、後悔通りへと移動した。重い足取りで行くの
かと思い込んでいたが、ノアのおかげで多少軽くなっている。

関所を越え、森の中の一本道を酒井だけが歩いていた。

歩いていると前方の木の陰から人影が三つあつた。

一人は、中年過ぎの、細い眼鏡を掛けた男だつた。

一人は、同い年くらいの、体格のいい男だつた。

もう一人は、二人目の背後に控えた少女だつた。

「おや、松平四天王の内、榎原・康政と本多・忠勝の二人がお迎えとはね。——俺もま

んざらじやないつてことか。井伊はどうしたよ？ 榎原、ダつちやん」

彼の言葉に、榎原と呼ばれた細い初老しょろうが、わずかに顔を上げる。

「それがな。酒井君、実は井伊君が「井伊については他言無用だ。忘れたか榎原」——なんですよ」

榎原が言つてはいる途中で体格のいい初老の忠勝が割り込み、うやむやにされてしまつた。榎原は唇を迷わせ、一度だけ酒井の方を見て、頷きと共に口をつぐんだ。

代わりと言うように、忠勝が半歩を前に出た。

「——見せろ」

瞬間。忠勝の背後にいた少女の姿が消えた。

対する酒井はが、浅く顔をあげて言う。

「は？ おいおいおい、お前の言う『見せろ』って、大体ろくな」とじや——

言葉が終わるより早く、酒井の背後に先程の少女が移動していた。そして抜かれた刃が酒井に向けられて放たれていた。その軌道は止まることなく酒井に動いてゆく。

だが、酒井は視線を少女に向けて避けようとした。そのまま何気ない態度で構えている。彼が何故動かすにいるか。

何故なら——

「——久し振りだね、二代」

「——ツ？！」

彼女の口から驚きの色を含んだ悲鳴があがつた。

酒井の背後にいた二代のさらに背後にノアが、音も無く、気配も無く、現れて二代の後ろから抱きついていたのだ。ノアの両手が前で交差するので二代の動きは止まつてしまつた。

「ノ、ノ、ノア殿!!」

驚きのあまり手に持つていた刀な落としてしまつていた二代。
「ずいぶんと速くなっていますね、驚きましたよ。色々と成長していく私は嬉しいですよ」

驚く二代を氣にもせずに抱きしていた腕に力を込めて、さらに密着した。その行動に二代は耳まで赤くなりながら、ノアの腕の中で悶えている。

「私もそろそろ二代に負かされてしましますかね」

「そ、それは無いと思うで御座る! せつしゃ拙者なんて、まだまだで御座る。それより放してもらえるで御座るか?」

ノアの言つた言葉に驚きつつ、否定する二代。耳まで真っ赤にしながらも言葉で放してもらえるか言う二代に対してノアは。

「イヤでしたか?」

「違うで御座る!! せ、拙者の、む、胸が爆発しそうなぐらい早くなつていて御座るよ

！」

ノアの方が背が大きいので、後ろを振り返つた二代は、ノアを見上げる形になつてしまい、何よりも顔が近いので動搖を隠しきれないでいる。二代が背伸びするだけで唇と唇が、くつついてしまうぐらい近いのだ。

「フフフ、相変わらず可愛いですね」

「せ、せ、拙者が、か、か、かわ、可愛いですぞ」

「ええ、とても」

「——ツ！（もう無理で御座る!!）

ノアは笑みを浮かべながら、さらに二代に近寄つた。鼻と鼻がくつついてしまうほど近く。

二代の方は、もはや心臓が臨界点を突破状態だつたので、自分が何を考えて、何を言えбаいいのが解らなくなつてしまつていた。近寄られたことにより、ノアの黄金とも呼べる瞳を間近で覗いてしまい、吸い込まれるような感覚を味わつてしまつていた。彼の瞳を見つづけることができずに気絶してしまつた。

「可愛らしい反応でしたね、二代」

自分の方に倒れてきた二代を優しく支え、頭を撫でていた。彼女も気絶しているのに悶わらず、とても幸せそうな表情で撫でられていた。

「さてと、ダっちゃんところの娘さん、完全に惚の字だね」

「若なら全然いいから心配するな酒井、よく父親の前であんな光景を見せられるな」

「凄いですね、ノア君」

外野にいた中年三人はそれぞれ感想を述べて、歩き出した。

場所は戻り、右舷二番艦・多摩の表層部右舷側商店街。

「ハイ、そういうわけで今まで大体揃いました？ 明日の打ち上げ用の御料理の食材は」
という巫女服姿の浅間の言葉に、ついてきていた三つの影は頷いた。

行き交う人々には三河から上がってきた者や、南側の陸路からやつてきたK. P.
A. Itali a や三征西班牙の学生達もいる。

そんな中に立つ四人の内の一人、直政が艦内整備用のレンチを右の義腕回して弄びつ
つ、他の三人、アデーレと鈴、そして浅間を見た。

「人数分とはいえ、一気に買いすぎじゃないかねえ」

直政の言葉が示すのは、皆が持つ紙袋の山だ。四人とも腕はおろか、肘にも釣つているし、腰のハードポイントにも懸架している。

「ガ、がつちやんやゴつちやんとか、……い、いてくれると、良かつた、けど」

他の三人に比べ、比較的少なめ軽めの鈴が、荷物を抱え直して言う。

「ナイトもナルゼも、あの二人、運送の仕事しますから。今頃は艦の間を飛び回ってると思うんですけど、頼んでおくべきでした」

浅間の言葉に眼鏡の少女アデーレが、はあ、と吐息した。

「まあ、浅間さんもお疲れ様です。巫女服で、浅間神社の仕事、今は忙しいですよね?」

「はい。春先の契約関係の仕事が多くてカウンター業務が多忙ですね」

「でもノアのおかげで、楽になつたんじゃないかな?」

「ええ、ノア君が考えてくれた術式で八割の業務仕事が楽になりました。それによく手

伝いに来てもくれますし、万々歳です!」

荷物を持ちながら体全体を使って喜びを表現しようとして荷物を落としそうになつている浅間。

「とりあえず、あたしらにこのまま付き合つて、今日の“幽霊探し”には来るんだろう?

あたしもチーフの泰造爺たいぞうじいに夜番の休み貰うけど——」

と、直政が浅草方面を顎で示した。貨物艦である浅草や品川では荷物の出し入れが行

なわれている。

「まあ、あつちがあるけど、ちょっと地摺朱雀じざりすざくで手伝つたら、すぐ行くよ」

直政が言い終わると、空が騒がしくなつてきた。浅草と品川方面や各艦の間に、白い霧の尾をたなびかせて空を突つ走り始めた影が幾つかある。飛行種族テクノヘクゼンや魔女達マジナだ。

「武神が監視を止めたから、配達業者の連中がレースと模擬戦やり始めたね」

「あ、ナルゼとナイトも今飛んでもましたよ？」あれ、こちらに向かつてきます」

浅間が言つてゐる間に、二人が四人の前に現れた。筈に乗りながら四人の前にゆつくりと降りて來た。

「アンタ達も“幽靈探し”参加するんでしょ？」

ナルゼが四人に言いながら手に持つ荷物を見ていた。

「ええ、ナルゼ達も参加するんですね？」

「うん、そうだよ。その為に今の内に仕事を片付けておくつもりなんだ」

常に笑顔でいるナイトが答えてくれた。

「ところで、二人共どうしたんですか？」

「あれ？　ノアから話し聞いてないの？」

アーテーの問いに疑問を持つナルゼ。どうやら話が囁み合つていないうだ。

「ノアに「皆が大量に材料とか買うと思うから運ぶの手伝つてあげて」って、言われてる

のよ」

「そ、そ、そ、でも報酬にノーチャン手作りチョコレートケーキを作ってくれるんだよ。いいでしょ？」

『な、なんだつてー！』

ナイト、ナルゼ以外の四人は驚きを隠せなかつた。

「わ、わ、わたし、ここ、二週間は食べて、ません」

「あたしだつて二週間と三日は食べていなきね」

「じ、自分は一ヶ月も食べてないんですよ」

「わ、わ、わ、私なんて一ヶ月と三週間も食べてないんですよ！」

女性陣の反応を見るからに、『美味しい』ということなのだろう。荷物を持ちながら見るからに落ち込む四人。

「まあ、一人一ホールずつ貰うから分けてあげるわよ。心配しなくてもいいわよ」

「それにノーチャンもそうするつもりだろうしね」

その言葉聞き、パツと、四人は笑顔になりながら二人に、ありがとう、と言い感謝して いた。

「それより、アンタ達の荷物持つて行くから貸しなさい」

「はいはい。ガツちゃん行こう！」

四人の肩や肘に持つていた荷物を持ち、飛んで行つた二人。

「ノアさんのケーキ楽しみです！」

「わ、わたしも」

荷物を持ちながら両手をあげて、楽しみそうにする二人を、浅間と直政が見守つてい
た。

「トーリ君もトーリ君ですけど、ノア君も慕われていますね」

「ノアが慕われてるのは当たり前さね、しかし、世間では織田だの大罪武装だの末世まつせだの
と煩いけどさ、まあ、そんな中、一人の馬鹿の告白が通るかどうかはホント、通し道歌
じやないけど……」

レンチを首後ろに担いだ直政が、午後半ばの空を見上げて言つた。

「怖いさね。……よくやる気になつたもんだ、あの馬鹿」

そして視線を落とした直政が、浅間を見て口を開く。

「アンタ、うちらよりも付き合い古いよな。喜美んど」と

直政に問われた浅間は、わずかに考えてから頷いた。

「まあ、古いと言つても、親の関係ですし、幼い頃の記憶なんて結構曖昧ですけどね」「
でも小等部以前からの付き合いはアンタとノアぐらいだろ。他は皆、小等部以後。だ
から皆、まあ、トーリがどういう人間は知つてるわけだが——」

「ま、正純さんが、ち、違います、あと、あ、東さんも」

鈴の言葉に、浅間は首を下に振つた。

「正純さんは去年の転入生で、東君も中等部からの編入なので、トーリ君のことを完全には解つていないと 思います」

でも、と浅間は首を傾げながら直政を見た。ふう、と吐息を吐く直政は言う。

「——こにいるあたし達は、トーリと同じように、ホライゾンにことを知つてゐる
その言葉に、浅間は、皆と共に沈黙する。一体、何を言へばいいのか、と。

沈黙が続きながら鈴が言う。

「あの、こ、この道の先つて」

鈴が首を横に振つて いる理由は、

「ああ、トーリとノアがいつも朝に寄つて いる軽食屋があるんだよな。でも安心しとけ、
この時間、鈴が恐れる相手は外に出てるさ。——彼女、午後の墓参りしてんだ。知つて
んだろ」

直政の台詞に、浅間は内心で驚きを得る。

「ちょっと驚きです。マサが、彼女のことに興味を持つてゐるなんて」

「——彼女の墓参りを知つてゐるアンタと変わりないさ。それにノアが毎朝、毎夜に墓参
りしてゐるのを知つてゐるはずさね。嫌でも覚える。それに——」

「それに？」

レンチを肩に担いだまま空を見た直政にアデーレは聞いた。

「早朝や午後の仕事の一服に外殻の非常階段を入れてると、聞こえてくるんだよ。あの歌が」

「あの歌と言いますと……」

「それも知ってるだろ？　と、既に歩き出した皆の先頭となつた直政が、

「通し道歌。あたし達が、ホライゾンと一緒に遊んだときに唄つた歌さ」

記憶にあるのは、黒の髪と青の目の少女だ。線が細く、しかし、今思い返しても、芯が強く、優しすぎると思えるときが幾度かある娘だつた。

「生まれが、大変な人でしたからね。……隣にいたトーリ君が、どんどん馬鹿になつていつたわけですよ。あれだけシビアな生まれだと、まあ、それを知つたのも——」

「彼女がなくなつてからですが」

その言葉に、皆が俯ぐのを浅間は見る。

「今回の告白で清算の始まりか、それとも継続化、それとも心機一転なのか……どうなんでしょう」

「少なくとも、……オッパイ揉もうと思つてるのは確かじやないかと」「ハ、ハイっ、そこしんみりしてるときにシビアな現実言わないと」

シリアルスな雰囲気が漂っていたが、一瞬で吹き飛んだ。

先程まで暗い表情を浮かべていた皆は笑っていた。

「そういえば総長が言及していましたけど、総長に揉まれたことあるんですか？」

浅間は驚いた表情をした後、すぐに慌てて首を横に振る。

「いえ、ノア君しかないですよ！」

「そりや、そうさね。アサマチつたらブラ着けてきた時にトーリの奴に後ろから揉まれそうになつたのを、ズドンしたんだからさ。しかも追撃に四回もだよ」

「ちょ!? 何言つてるんですか、マサ——」

ははははは、と五回笑つて浅間の肩を叩く直政。

「あ、私その日は朝練引きずつて遅く来たんですけど、教室の窓が全部破壊されてたのは、そういう理由だつたんですね。よく総長無事でしたね」

「そ、それ、は、トーリ君、だもん」

「それは確かにな」

「ははは。というか、マサだつて触られそうになつた時に地摺朱雀呼んで、ボコボコにしてませんでしたか？」

「いいじやねえか、と直政が言つた。

「——ひよつとしたら明日から、こういう話もしにくくなるかもしんねしさ」

そうかもしませんね、と浅間が返す。鈴やアデーレも頷いていた。

「ま、そこらへん、喜美も解つてんだろ。さつき解散する際に、別れ際に、トーリが“後悔通り”に行つて見るつて言つてたからな」

「トーリの馬鹿は、あれから十年、”後悔通り”を歩いたことがない」

解つてるよな？」と直政が言葉を続ける。

「今日の朝だつてワザと遅刻したんだろうさね。ヤクザ事務所から帰つてくる時にノアの奴にも言われていたしね。「また逃げましたね」つてね」

「そうですね。順番的に次は右舷の方、”後悔通り”を通る可能性が高かつたですね」

浅間が答えると、アデーレが奥多摩の方を見た。眼鏡の奥の目を細め、

「では、あの、喜美さんが階段に座つたままだつたりするのは——」

「馬鹿な弟が、”後悔通り”を通れるかどうかを見守つてているのさ、馬鹿な姉として」

馬鹿な女さ、と直政が一步を先に行きながら言う。

「それでいてあたし達も馬鹿さ。ここにいる皆、いや、うちのクラス全員は、あの馬鹿女やノアに頭が上がらない筈だ。何しろ——」

何しろ。

「トーリを向こう側に行かせなかつたのは、あの馬鹿女、そしてその行動を支えたノアなんだから」

その言葉に、皆が歩きながらも息を詰める。周囲の、商店街の物音や賑やかさも気にならぬという風に、しばらく無音が続き、だが、

「そうですね」

と、ようやく浅間は自分の言葉を得た。

「ノアが喜美の行動を予想していたからこそ、トーリは立ち直れた……喜美が目を覚ませ、ノアが二人を後押しした」

皆より先に行く直政が語りだす。

「ノアの手紙……あたしも見たけど、泣いてしまったさね。自分でも何でだか、解らなかつた。浅間やアデーレだつて泣いたよな？」

振り返つて聞く、直政に浅間やアデーレはビクッと、体が反応した。

「あ、あの手紙は、字が綺麗とかいう問題ではなかつたです。まるで自分の命を掛けて書いた気持ちが字から伝わつてくるのを感じました」

「だ、だつて、あんな、一生のお別れのような文章を見たら、泣いてしまいますよ！」

「わ、私も、読んで貰つて、泣い、ちやつた」

三者共に泣いたことを話した。

そのことを聞いた直政は、やつぱりな、と言ひながら言う。

「四年後に何事も無かつたように戻つて来たときは、驚きと嬉しさで、発狂していたね」

「荒れましたね」

頬を指で搔きながら思い出している直政に浅間も便乗する。

「ノアさん自身は悪くないのですよね……」

「と、トーリ君が、てがみ、捨てちゃつた、のが、げんいん」

「あの馬鹿が、ノアが送った手紙を悉く捨てていたってね。その枚数156枚！」

「トーリくん曰く、「英語で書かれたらわからんねえよ！ “NOA”じゃなくて、カタカナで“ノア”って書けよ！」その後、私達がボコボコにしましたね」

うんうん、と頷く面々。

「でも、全ての始まりが、——ホライゾンなんだと私は思います」

「ホライ、ゾン……」

鈴が、うつむきながら口を開いた。

「や、優しい人、だつたの」

鈴が小さな声で言つた。その上で、あのね、と前置きする。

「し、知つてる？ ノア君やトーリ君、私を呼ぶとき、初めに、いいですか、とか、御手とか、おーいとか、あさあ、とか、絶対言うの。そして、わ、私に手を差し述べたり、触れるとき、あ、あの、手を、こ、こうやって」

浅間を含む皆の視線の先、鈴の手が、自分の制服の腰のあたりを拭うように触れた。

それは手拭うような動きに見える。衣擦れの音を含むものだ。

「これ、あ、合図なの。——私、眼、み、見え、ないから、いきなり名前、呼ばれたり、触れられると、び、びっくりして、迷惑掛けるか、ら、だ、だから、先に別の声や音、つて」

「ああ、あたしらも、真似してそうしてるつけね。小等部の時にノアや馬鹿がそれやつてるつて気づいたときは、ノアがそういうところ気にするのは知っていたけど、あの馬鹿細いところで点数稼ぐもんだと思つたけど……」

ううん、と慌てて鈴が首を横に振つた。

「ホライゾンが、それ、始めたの」

息を吸う。

「トーリ君、ホ、ライゾンが居なくなつても、……忘れ、なかつた、の。四年間いな、かつたのに、忘れなかつた、の」

そつか、と直政が言つた。悪かつた、とも。

「ホライゾンか……面倒見が良くて、気が利いてた子だつた。ノアとそつくりだよ」

「ノア君の後ろに良く付いて行つて、まるで兄妹のようでしたね」

直政と浅間が言つた。言つた後、すぐに正面から声が來た。

「あれ？　君達も結局こつちで買い物？」

この声は、と顔を向ければ、正面尾歩道を幾人かの男子生徒が歩いていく。

やはり紙袋を抱えたネシンバラやウルキアガ、シロジロにハイディといった面々だ。

「何だいアンタ達、明日をどこまで祭にする気だい」

「あ、僕達のは今夜分だから。でも、——食材とか被りそっだなあ」

ネシンバラの苦笑に、皆もつられて苦笑する。

「でもノアさんが料理するなら大丈夫だと思いますよ」

「確かにね」

「それもそうだね」

アデーレの発言に直政、ネシンバラが頷きながら答えた。

「ノア君がここを紹介してきたから、ここに来たんだよね」

と、ハイディが逆側の歩道、左舷の店の並びを見た。

皆がつられて見る先には、一軒の軽食屋がある。パン屋と兼業の店で、今の時刻は準備中。店主の女性は店先の掃除をしながら隣接商店の主人達と談笑していた。

浅間は、鈴がこちらの背後に回ったことに気づく。だからそれとなく、小さな声で、

「鈴さん、去年以降、ここに来たこと無いんでしたつけ

「うん。……違つたら、こ、怖いから」

そう、と頷いた浅間は、腰のバインダースカートに軽く触れてから鈴の肩を支える。

そのときだつた。軽食屋の女店主が振り向いた。彼女はこちらに気づくと笑みを見せ、

「何だい何だい、今日は朝から教導院の客が多いね。ノアも来たけど、まだ時間外だよ？」

「あ、すいません」

と返答したのはハイディだ。ハイディは頬に手を当て、浅く一礼してから、

「あの、……ひよつとしたら、明日、お騒がせするかもしませんが」

「宴会でもやる気かい？ だつたらP—01sにも頑張つてもらうとしようかな」
はは、と笑う彼女にハイディが言葉を告げるのを浅間は聞いた。

「宴会……、そうですね。はい、大丈夫だと信じてます」

一息。

「楽しい宴になることを、皆、祈つてますから」

第五話 酒房の清純者

酒井とノアは本多忠勝らに付いて行きながら移動し、ある民家の中に入つて話をしていた。

移動している途中にノアがお姫様抱っこで二代を運んでいたのだが、気絶していた二代が目を覚まして一悶着あつたのは余談だ。

「——というわけだ。昔の記憶なんぞ、悪い記憶しかない」

「いいかあ、そういう昔を忘れて心機一転、左遷でいじけてたお前に対し、ようやく十年ぶりに我らが会おうと言い、昔なじみの場所まで予約とつて用意したというのに——」

と、奥の卓を囲んで親父組三人と少女一人、少年一人という面々がおり、忠勝が酒を

飲み干したジョッキを声と同時に卓へ叩きつけた。

「酒井、若に迷惑掛けてないだろうな？」

「あのは、俺がノアに迷惑掛けているわけないだろ！ なあ、ノア？」

忠勝の言葉に対し酒井は笑いながら答え、ノアに聞く。
「迷惑をかけているといえば……YESです」

少し考えて言うノア。

「ちよ、俺がいつ迷惑かけているんだよ」

ノアの答えに納得できずに聞く酒井に対して、忠勝や榎原は「ほらみろ」という表情を浮かべていた。

「いえ、私自身ではなく、武蔵さんや奥多摩さんに迷惑をかけているのですよ」

「ほうー、武蔵の自動人形にか」

「へえー、自動人形ですか」

ノアの言葉に忠勝榎原が興味深そうに聞いている。

「えっとですね。業務の仕事を奥多摩さんに頼んだりして、自分は街に出て視察というの遊びをしながら和菓子を食べて仕事をしないときました」「げっ！（心当たりしかないんですね！）

ノアの言葉に明らかに動揺している酒井。自分の内心で思い当たる点がありすぎて

困っているようだ。

「私と武蔵さんが酒井学長の行動を監視してハッキリと分かりました酒井学長はとるに足らない存在であると」

「ぐはあツ！」

ノアの話を聞いた酒井は仰向けに倒れて衝撃を受けたようだ。

「父上にノア殿、出来れば改めてご紹介を——」

（本多・二代 side ）

剣を学ぶ本多・二代にとって、父である忠勝を含む松平四天王は特別な存在だ。

現在、三河は人払いや新名古屋城の稼動による怪異の多発によつて、人が少なくなつてゐる。数少ない人間の重臣として残つてゐるのは父や榎原だけで、他は自動人形に襲名権を奪われたり、辞退して去つていた。

今日は昔なじみの人と会うという……実質、松平四天王のリーダーとされる御仁。

昔に会つていたことがある。話もしたことがある。が、十年以上前のこととで、よく覚えていないし、相手の存在の価値も意味も解つていなかつた。単なる猫背のオヤジだと

ばかり。

そしてもう一人、酒井と一緒に訪れてくれた人物、ノアという人物だ。二代の中で彼は特別な存在であり、恩師であり、初恋の相手でもある。彼なしの人生などありえないほどの存在価値を二代は思っている。

今、目の前には酒井、隣にはノアがいる。ノアと肩が触れ合いそうなぐらいの距離で酒井の言葉を聞いている。

「あ、俺、酒井・忠次ね。君のお父さんとかよりマジ偉いから。俺と君のお父さんは地元組で、そつちの榎原と、ここにいない井伊は編入組。三十年前だつけ、武蔵アリアダスト教導院が武蔵に出来た時に、こいつら余所から入ろうとして入れなかつたの」

「あの時期は、アリアダストが開放的であることを示すために異国人の編入を第一としてましたからな。私や井伊君は神州のためを思つて編入を辞退したまでです」

「うわ言い訳上手いね、ともあれ学生時代は殿先生、——元信公が学長兼永久生徒会長だったから、俺が総長で、君のお父さんが特攻隊長」

「副長つていえよ馬鹿野郎」

「んで、井伊が副会長で、この榎原がまた口先だけの男でなあ」

「口先……」

榎原は麦茶を飲んでいたが、二代やノアの視線を受けると慌てて手を振り、

「べ、別にそんなことは無かつたですぞ！　書記で、文系としての能がありましたしな！」

「そうだつけなあ、と父と酒井が頷いていた。

「そうですね。榎原さんは文系能力に長けていたと思いますよ。私は文章でしたか見たことありませんが、武蔵の書記・軍師のネシンバラが高く評価していましたね。これにサインを頼まれましたのでお願ひします」

「おほほ、お安い御用ですよ。いくらでも書いてあげます」

上機嫌になつている榎原はノアから渡された本に自分のサインをしていく。満面の笑みで複数サインをしていく榎原は誰が見ても嬉しそうであつた。

一方、日本酒ピツチャ一を掲げた酒井は笑みを浮かべて二代に問う。

「ダ娘君、そろそろ体育会系親父の洗脳解ける年頃でしょ？　反抗期でしょ？　うちの教導院来ない？　君みたいなの、かなり欲しいなあ俺。本多・正純もいるよ？　憶えてる？」

「ダ娘……、と、二代は口端を歪めてつぶやく。だが、今の言葉には見知った名前があつた。

「正純とは、中等部以降、あまり顔を合わせておりませんぬが、武蔵に行つたと聞いておりました。今は何やら副会長になつてているとか……」

「そうですね、正純は副会長ですよ。私も二代が来てくれれば嬉しいですよ」

この一瞬、二代の心はすぐに武蔵に行こうという考え方で決まっていた。酒井の言う事よりもノアに言われたことで、すぐに決心がついてしまった二代。

「——では、すぐに支度してくるで御座る」

「待てい、二代」

その場から立ち上がり、すぐに自分の部屋に戻つて荷造りを始めようとする二代の首根っこを掴み座らせる忠勝。

「今回は安芸までの安全とかを調べるのをお前に任せてあるんだぞ。そのお前がいなくなつてどうするよ」

「あう、申し訳ないで御座る」

忠勝から容赦ない鉄拳を頭に喰らい、その部分を痛そうに撫でる二代。

「安芸まで行つて戻る際だが、そこからは先は降りるなり何なり好きにしろと言つただろう」

「好きにとは——」

酒井の問いに、父が答えた。

それは、先日に父と決めたこと。これから先の己の身の振りとして、
——全部、自分で決めろつてことだ。だから、そのとき誘え。二代が武蔵やお前が必要

だと思つたら、そつちに加わるだろう。我的名を襲名しよう思ふなら、また別のこともあるであらうよ。そういうことだ」

父が言つた。

「これから先、世が動く。——娘くらいは、好きに動かせてやりてえもんだ」

「いいよなあ」

……え?

酒井の目が、こちらを向いた。酒井は、わずかに眉をたてて笑みで、

「松平家最強、いや、極東側の東国側において”東国無双”と言われた本多・忠勝が選んだ逸材だ。——育てて面白かつたろう? どれだけ期待してんだホントに!」

「お前、我を褒めてるようで二代しか興味ないな」

「当たり前しょ。引退決めつつまだ副長やつているジジイより若い子の方が騙しやすいし。しかし”西国無双”的立花・宗茂が三征西班牙の大友で襲名されちまつたから、こつちはコネで何とかならないかと思つてんだがなあ」

酒井が一息つく。対する二代は、内心の振るえをとどめるのに精一杯だ。

松平四天王の元リーダー。十年のブランクをおいた彼を試すため、父の命令で私服の彼に先ほど仕掛けた。それも、加速術式の準備を整え、父から相手の癖を聞いた上で、だ。

だが結果はノア殿に抱擁されて撃退されてしまった。

術式移動していたにも関わらず、気配すら感じさせずに。

……自分に確かな力があるのかどうか、不安があり申す。

先ほど名前の出た立花・宗茂は、昔に西国無双と呼ばれた西国の強者、立花・道雪の養子であり、既に各地を転戦していると聞く。

いずれ自分も、と思っていることが、とうとう現実になる。

ノア殿の隣に立つてよう励み申す。

／ 本多・二代 side End ／

遠く、店の外から足音が響いてきた。二代が店の出口を見て、入ってきた足音の主を、

「鹿角様」

「J u d .」

答え、座敷の上がり口で足を止めたのは、長身の侍女服姿の自動人形だ。耳の位置から上に伸びる黒の角型感覚器を見た酒井は、手についていたジヨツキを思わず取り落とし、

「げえ、鹿角……」

「J u d. ——下らない。どなたかと思えば酒井様ですか、それと——」

「彼女、鹿角は半眼で視線をもう一人の方に向けた。

「お久しぶりです鹿角さん。相変わらず美しい今まで」

「ノア様も更に磨きがかかつたと思いますが」

「はい、と答えるノアは鹿角の前で膝をつき、手を取り、優しく彼女の手を包んだ。

「鹿角さんも暖かいですね。あの子と一緒にだ」

彼女の手の体温を感じ、そしてこの場にいない人のことを思う。数秒そうして手を離した。

「すいません、いきなり手を握つてしまい、紳士として恥ずべき行為でした」

「いえ、お気になさらず」

鹿角はノアに握られた手を多少見た後に言う。自分でも理解できていないものが内心で渦巻く鹿角に酒井が話す。

「おやおや、鹿角もノアの前では何も言えないようだね」

「左遷からのこのここんなところにやつてきて若い未来ある少女と少年に対してサービスもせずに酒飲みとは、たいした大人だと判断できます」

「……ダつちゃん、十年前と同じで、相変わらずこの女、ダつちゃんと？」

「しようがねえだろ、コイツが一番うちの女房の料理の再現出来るし、女房の剣筋の再現

出来るし、礼儀作法とかも、人に教える分はちゃんと出来てなあ」

J u d. と、鹿角が頭を下げた。

「現在は、私が二代様の基本師範を務めております。二代様も年頃の女性ですが、忠勝様ときたら風呂に入ろうとか焼き肉屋行こうとかかなり駄目ですの。——情けない」

「ああ、昔からダつちゃんのダは駄目人間のダだからねえ」

酒井が言つた間だ。その眼前に、右目の正面三センチの位置に、鋭いものが突きつけられた。

竹櫛たけぐしだ。

焼き鳥を刺していた一本の竹櫛が、宙に浮き、こちらの右目に向けられている。
見れば鹿角が右の手を肩の高さに突き出していた。

「——重力制御の有効範囲内として充分です。忠勝様はこんな駄目でも当家の主です。
愚弄はおやめ下さい」

「ダつちゃん、この女、相変わらず“自分はいい、他人は駄目”の鬼ルールかよ。主だつたら何とかしろよ。十年以上これつてのは、自動人形として人格壊てるだろ」

「我、口喧嘩は弱くてなあ」

忠勝の後に鹿角が口を開こうとしたがノアが割り込んできた。
「ていつ」

「うつ、イタ、何をするんだノア」

軽く酒井の頭をチョップした。

「自動人形にもそれぞれちやんとした人格があるんです。それを「壊れている」なんて失礼極まりない、以後、気をつけて下さいね、酒井学長」

「J u d . j u d . 分かりましたよ」

「――学長」

「すいませんっす！」

曖昧に答えた酒井に冷めた笑顔浮かべて、ちゃんと謝らしたノア。ノアの笑みの後ろに般若の仮面を見た酒井は一瞬で土下座をした。

「ありがとうございます、ノア様。酒井様も以後、お気をつけ下さい」

ノアの事を一度見て、酒井の方に向き直った鹿角は言葉とともに、竹櫛が皿に降りて他の櫛と並ぶ。

それと同時に、鹿角が一礼して告げた。

「そろそろ二代様の船の準備をお願い致します」

J u d . J u d . と、忠勝が立ち上がり、二代も一礼して身を立たせた。

さてなあ、と背を向けた忠勝は、しかし、右の手を軽く上げ、こう言った。

「――では、私はここまでだ。この先、しつかりやれよ」

そして女二人と男一人、どれも武者の力を持つ三人が料亭から出ていくのを、酒井、榦原、ノアが見送ろうとしていた。

「二代、ちよつといいかな」

「はい、なんで御座るか?」

別れ際に二代を呼び止めてノアの真正面に立たせる。

「ちょっと手を出しきれないかな」

「……?」

ノアに言われるがままに右手をノアに向けて出す二代。

「——はい、これプレゼントね

「ブレスレットで御座るか」

手首の方にブレスレットを付けてあげるノア。そのブレスレットを珍しそうに見る

二代は嬉しそうである。

「そのブレスレットには色々と加護が付いているから、大事にしてね」「はい！ 大事にします！ 片時も離さず付けているで御座る！」

ブレスレットを大事に握り、ノアに詰め寄り笑みを浮かべている。詰め寄ってきた二代を抱きしめながら頭を撫でるノア。

「また会えるのを楽しみにしていますよ、二代」

彼女の耳元で呟くノアに対しても一瞬だけ震えさせる二代。

「せ、拙者も、た、楽しみにしておるで御座る。（み、み、耳元はヤメてほしいで御座る）

二代が動搖しているのを確認して離れる。抱き合っている状態から離れた二代は、あつ、と

寂しそうな声を漏らしていた。

「今度会つたら色々しようね」

彼女に一声かけて忠勝と鹿角がいる方へ優しく押してあげた。今の一言で何かを思つたのか、ブツブツ言いながら忠勝達と合流した。

「じゃあな」

「失礼いたします」

忠勝は手を上げて言い、鹿角は一言の後に一礼して歩いて行く。その後姿を三人で見

守った。

「では、私もここで退散します。酒井学長と榎原さんはまだ話したそうなので、私一人でお先に失礼しますね」

最後の言葉のあとすぐにノアが二人の前から消えていた。ノアの周りにあつた落ち葉が少しだけ風で舞っている。

「ノア君には隠し事はできませんね」

「空気を読める奴だな、たく」

榎原から、少し歩こうと言われ、歩きながら話しをする二人。

第六話 中庭の友達

夜の武藏アリアダスト教導院に多数の人影がある。

「夜の教導院は、やつぱり雰囲気が出ますね」

ノアの言つたことに対して喜美や鈴が肩をビクツと反応させていた。二人が怯えているのが分かつていたノアは二人をの傍らに寄り、自分の方へ抱き寄せて、頭を撫でてあげた。

「あ、ありがとう、ノ、ノア君」

「もつと強く抱きしめなさいっ！」

鈴と喜美もノアに体を預ける。喜美はノアの胸に頭を乗せて和み、鈴は背が低いので腹部に両手を回して抱きついていた。

「トーリの馬鹿は、まだ来ないのかい？」

「総長遅いですね」

「トーリ殿は、何をやつているんで御座る」

「まさか、今日手に入れた「ぬるはち」をプレイしているのでは？」

それぞれがこの場に来ていないトーリに愚痴る皆。

「では、先ほど作つてきました、どら焼きとたい焼きを食べながら待つていましょか」ノアは撫でていた手を一旦離し、手を前に出し、小声で何かを言うと手の上に大量のどら焼きとたい焼きが出現し、男性陣は小腹が空いていたので丁度良く、ノアが男性でも食べやすいように甘さを控えめにしているどら焼きを食べる。

「たい焼きは、チョコ、カスター、あんこの三種類の味があるからね」ノアの言葉に女性陣は悩みながら選んで食べていく。

「あんこ美味しいです！」

「浅間さん、カ、カスターも、おいしい、です」

「ガツちゃん、チョコとあんこ食べさせあいつこしよう」

「いいわね、でも相変わらずノアの作る物は美味しいわね」

「ノアさん、何でも出来てスゴいですよね」

「パーフェクトよ、ノア。生地のモチモチ感、カスターの甘さ過ぎない味、何よりも『思い』を感じるわ、そう、情熱のような炎が、熱い思いが！」

「J u d . J u d . 喜美が暴走しているのは放置で。確かに、美味しいさね」

女性陣は大量に用意あつたはずのたい焼きを全て平らげてしまつた。

「どうだい、東。美味しい？」

ノアは今日戻ってきた東に味の感想を聞いてみた。

「J u d. 余はこんな美味しい食べ物を食べたことないよ」

「ノアの前で美味しそうにパクパク食べていく東を見て微笑むノア。

「それは何よりです。ところでミリアムとは仲良くなれそうかい？」

「ううん、大丈夫だと、余は思っているけどちょっと不思議なのが正直な気持ち」
どら焼きを食べながら不安げな表情を浮かべる東に対してノアは言う。

「正直なのは偉いです。ミリアムはとても賢い子です、東とも話をしていくうちに仲良くなっていくよ。最初はちょっとだけ警戒しているだけだよ」

「本当?」

「J u d. 待ってるのも男の子の大切な役割ですよ」

不安げな表情をしている東はノアの言葉を聞いて、一変して嬉しそうに満面の笑みを浮かべている。東の表情につられて、ノアも笑みを浮かべる。

「マルゴット、あの光景を見て、色々浮かんでしまう私はダメなのかしら?」

「ナイちゃん見る限りじゃ、仲の良い兄弟に見えるけど?」

「いえ、あれは……東受けのノア攻めに決まっているじゃないッ!!」

一部が東とノアのことをネタにしようとしたのは、二人は知らない。

「甘い物を食べていい気分だから、さつきの話の続きをしようとか。ここだけの話つて何

なの、アサマチ?」

ハイディが話を切り出してきた。名前を呼ばれた浅間は、絶品たい焼きの美味しさの酔いに浸っていたが、ハツと意識を戻した。

「は、はい、それは——」

直後、浅間の近くに移動していた喜美が両手を振り上げた。

「ここからは浅間に於けるスーパー工口話タ——イム!!」

「えええ、ちょっと喜美ってば勝手に何を——、というか男衆も正座しない。あのですね、喜美はどうしていつもいつもそういうことを——」

「だつて私、工口の神様を奉じてるもの。正確には芸能ウズメ系のサダメ派ね」

う、と浅間が息を詰めた。対し、喜美が浅間の肩を笑顔で叩いて、

「フフフ、アンタんどこで代理契約した時なんて、女しか儀式に関われないからアンタが手伝いで来て、裏の滝で二人で脱いで——」

「おうわあ——!!」

浅間の大声で喜美の発言をぶつた切った。そのあとで皆に振り向き、あたふたと、

「へ、変なことあつたわけじゃないですよ!? ですよ!? ギ、儀式は基本的に機密なので、口外は神の個人情報をバラすというか——」

「フフフ、ノアを家に呼んでいたのを忘れていて、気配でノアが裏の滝まで来た時は、ア

ンタ私より早くノアに抱きついていたじゃないの」

「あ、あれは、体を隠す物が近くなくて咄嗟に^{とっさ}」

「ふうん、咄嗟に抱きついてキスまでして、そのまま服を脱がす人がいるのかしら？」
「わああ——!!」

喜美の発言に喜美の肩を掴んで激しく揺らす浅間。男衆は正座しながら興味津々に聞いている。女性陣も男衆の後ろで話を聞いている。

「服のボタンを一つ一つ外しながら、ディープなディープなキッスをして、うつとりしながらノアのたましい胸板を舐め——」

「うひや——！ ちよつと喜美っ！ それ以上は私やノアくんが恥ずかし——」「智は私の上半身を味わい尽くしたあとに、ゆっくりとズボンを脱がしに——」「きやあッ——!! つてノアくんも参加しないで下さいつ！」

浅間の後ろから話し掛けってきたのはノアだつた。喜美の悪ノリに参加している。
「その後はモ・チ・ロ・ン、ノアの流体砲でズドンよね？」

「べ、別にズドンされてイつちやつたわけないじゃないですかからねッ!? そうです、あれは快楽が全身を支配し、昂^{たか}ぶらせたんです」

からかわれてるつて気付けよ、と何人かが言うが、一部は顔を真っ赤にさせて動搖したり、下半身を抑えている男子もいる。

「と、ということは、つまりそれはアオカ——」

点蔵は最後まで言えず校庭に吹き飛ばされた。七回は転がつて行きうつ伏せに倒れた。

「て、点蔵おお——」

何人かの男子が叫ぶが彼が起き上ることはなかつた。

「勝手に殺さないでくだされッ!?」

急に飛び起き叫ぶ。

「つて、浅間殿！ なにやつてるんで御座るか！ 反応できない速度で構えて撃たないでくだされ」

「え、点蔵くんがムカついたので、つい」

点蔵をふつ飛ばしたのは浅間であつた。三つ折り状態から一瞬で展開させ、一瞬で射撃したのだ。

「死ぬかと思つたで御座る！」

「ちつ」

「舌打ちしたよね、舌打ちしたよね、この駄巫女」

点蔵が一人で騒いでいる、シロジロが、

「葵姉、単に怖い話が苦手なだけで話をそらすな」

「そ、そうですよね、そうですよね、駄目ですよね！　喜美つたらホラー能楽見ると椅子に座った時点で氣絶してるようにヘタレなのに、そういうの工口話で誤魔化そうとして！」

！」

「ああ。——だからそういう工口話はちゃんと私に売れ。十倍にするから」

「さ、最悪——！」

まあまあ、とハイディイが仲裁に入る。その上で彼女は、

「はいはいアサマチー、さつきの話の続きしようつか。一体、ここだけの話つて何なの？」

「う、うん、それはね……」

というタイミングで葵姉がまた何か言おうとするのをノアが抱き寄せて止めた。

そして浅間が、周囲が沈黙したのを確認した後で、ゆっくりと告げる。

「実は、……結構、あるんですよね」

その言葉に喜美が、これ？　これ？　となぜか自分の胸を笑顔で下から寄せ上げてくるのを、またノアが止めた。

そこからは都市伝説である“公主隠し”的話しながら雑談をした。

“公主隠し”が起こり始めた歴史、最近になつて復活したという話、そして実際に本多・正純の母親が遭つたという話。

そして一番起こつている場所は、現在いる三河周辺と帝がいる京の周辺という。直撃

圈内にいる。

「皆、私があげたブレスレットはしているかな？」

喜美が震えながらノアに抱きついてるのを気にすることなく、ノア本人は皆に聞く。ノアの言葉にそれぞれブレスレットが付けている手を上げて分かりやすく見せてく
れている。

「このブレスレットには、色々と私の術式が刻んであつてね。魔を打ち祓う加護、病魔を打ち祓う加護、呪術を打ち祓う加護、と色々と入つているから『公主』ぐらいなら一度は祓えるかも」

喜美のブレスレットを触りながら解説するノアの言葉を聞いて、驚きを隠せないでいる。

「え、ノアさん、それって本当ですか？」

アデーレが自分のブレスレットを触りながら聞いてくる。

「ええ、ちゃんと効力がありますよ。あと、これを聖連に売ると軽く見積もつても武藏が一ヶ月は養えるぐらいの価値はあると思うよ」

その言葉にまた驚く梅組メンバー。

「ほ、本当に御座る？」

「本当、本当」

「ノア、貴公が作つてくれたこのブローチもか」

「うんうん、ウルキアガはブレスレットとか無理だからそれにしたけどね」

「そ、そ、それは本当なのだなノア」

「う、うん、つていうか大丈夫かシロジロ?」

「あはは、シロ君たら動搖を隠せてないよ」

「吾輩は何も持つていないが?」

「ネンジには前にノア特製のグミを食べさせたでしょ、あれに施してあつたのだよ」

「この場にいる皆が自分のブレスレットに触りながら述べる。

「でも都市伝説だからゆつくり考えていけばいいんじゃないのかな?」

「そうよね、しょせん所詮都市伝説だからね」

マルゴットとナルガが手を繋ぎながら言つてくる。

「そうだな、怪談としてはいくらか効いたな。でだ、今いるのは、正純は住んでる多摩の艦首側に三河の花火とやらを見に。東は引っ越しで遅れて、ミリアム・ポークウは無理、そしてミトツダイラは家が夜間外出禁止だな。となると……、あとは仕込み中のトーリが……」

シロジロが言つた瞬間だ。

「オッケー、遅れた!わり悪い悪い!」

いきなり校舎の正面玄関が開き、トーリが校舎の中から顔を出した。
そつちかよ、という皆の顔を前に、彼は笑みの顔で校舎内の闇を示し、

「早く来いよ！――暗くて面白いぜ!!」

「はい、そういうわけで着きました図書室」

という浅間の言葉が教導院内に響いた。浅間の近くには四つの影がある。
影の一つに艦内整備用のレンチを担いだ直政がうんざり顔をしていた。

「どうだい、アサマチ、ノア。靈視のないあたしらにや、居ても大物以外見えないんだけ
どね」

彼女の横にいるアデーレが吐息混じりに、

「ですよねー……、ラップ音とか解りやすければいいんですがね……」

「ラップ音という言葉に慌てて首を左右に振つてみせるのは鈴だ。

「や、それは、困ります、音は……、や」

「大丈夫ですよ。この辺りにはいませんよ」

怖がつている鈴に優しく接するノア。

浅間も、J u d . と言い答える。アデーレや鈴が、ほつ、としている間もなく。

「あの辺りにいますね」

「そうですね。あの辺りにいますね」

ノアの言葉と同じく浅間も頷きながら言う。そして廊下の向こう側に弓を構えて射撃した。

一秒してから、

「よし」

「お見事」

という浅間の領きとノアの言葉に、直政は平然と無言で、アデーレは慌て、鈴は身を震わせた。

「な、何！ 何ですか？ 一体！」

「あ、気にしないでいいですよ、離れなければ大丈夫です」

「全然安心出来ないですよー!」

アデーレの叫び声が廊下に反響する。

「あんまし声出すると、寄つてくるぞ。昼に静かでも夜には動くもんだしな」

「ナ、ナオさん、……ずいぶん、詳しい、ですね」

「そりやよくアサマチのトコに遊びに行くからね。それよりアデーレは機動殻^{きどうかく}持ち込めばいいだろうにさ」

「いや、最近ようやく着られるようになつたんですけど、旧式のせいか重くて」

見てみたいなあ、と興味有り気に頷く直政は、一度だけ周りを見渡して言う。「ノアを除いたら、昼間にいたメンツだね」

そうですね、とアデーレが頷きながら反応し、浅間も鈴も頷いていた。

「そうちつたのですか。そういうば買い出しを手伝えなくて、すいませんでした。重かつたですよね?」

「そ、そんなこと、ないよ、ノア君が、ナイちゃん、ガツちゃんに、荷物運び、手伝つて、頼んでくれて、いたから」

「そうさね。気にしなさんな」

「ありがとう、とノアは答える。

「さてと、入りましようか」

弓片手に浅間が扉に手を掛ける。

「ま、待つて、もし、も、急に、出て、きたら、どうするの？」

鈴がノアの服の袖を掴みながら言つた。怖がつているのか、多少だが脚が震えている。

「大丈夫ですよ。私が守りますから、心配しないで下さい。鈴さん」

袖を掴んでいた鈴の手を握つてあげるノア。ノアに手を握られて安心したのか、震えが止まつていた鈴。

「ノアさん、ノアさん、私もお願ひしていいですか？」

アデーレも怯えていたので、どうぞ、ともう一つ空いている手でアデーレの手を握つた。

えへへ、と二人とも笑みを浮かべて嬉しそうにしている。先程まで怖がつていたのが、嘘のようだ。

その光景を見ている浅間に直政も微笑ましく見守つていた。

「では、いきます」

浅間の言葉が聞こえ、すぐに扉を開けた。

あの後、図書室では変態二人が待ち構えており、その光景を見た浅間は無表情で射撃をぶち込んだ。浅間以外の皆はすぐに中庭に避難している。問答無用で射撃しまくる浅間に流石のノアも止めに入ることが出来なかつた。

「あつ、また爆発しましたね。浅間さんでしようか、マルさんでしようか」
アデーレの言葉に鈴が、二人共、と言い、アデーレは納得していた。

「鈴さん、音とか大丈夫?」

「J u d . 、ノア君が、いるから、大丈夫」

あれからずつと座りながらも鈴と手を繋いでいるノア。

「喜美も大丈夫?」

「今は、大丈夫よ、今はね……」

鈴と手を繋いでいながら反対側で、喜美が抱きついている。先ほどまで発狂していた

のに落ち着かせるために今の状態になつてゐる。喜美は座つてゐるノアの膝に頭を乗せて休んでいる。

「はあ、はあ、予想以上に疲れました」

浅間が教導院の中から出てきた。息を切らしながらおぼつく足取りで中庭まで歩いた。

「お疲れ様です。水を汲んできますので、喜美をお願いし——」

「イヤアア——」

「……無理そうですね」

「ノ、ノア君、私が、汲んできます」

「すいませんがお願ひします。鈴さん」

「J u d.」

喜美がノアを離さなかつたので、鈴が変わりに水汲みに行つてくれた。

鈴が行こうとした方から大きな声が響いた。

「一体何の騒ぎだこれはあ——！」

麻呂まろの町でこの狼藉とは！』

皆が振り返り、その声の主を見てみると、鈴の前に立つていたのは王様、ヨシナオだ。

「全くもつてけしからん！ 誰だ、こんなことを始めたのは！ 出てきたまえ！」

全く正論だな、と皆が頷く中、ヨシナオに対して違う反応をする者がいる。

「——ひやつ」

怯えた声が聞こえた。その者はヨシナオの正面にいた。

「——ひ、あ、あつ」

両手を胸に当て、震えを押し殺す鈴だ。

目が見えない鈴は無防備に殴られたのと同じ状態だ。

「——？ どうしたのかね。言いたいことがあるなら言つてみたまえ、さあ！」

その促しに、鈴は大きな口を空に向かつて開いた。

「うわーん！」

鈴が泣いた。

それまであつた音を吹き飛ばす音に、皆が引き、ヨシナオは慌てた。

「こちら君、一体——」

「この、こ、この、おじ、ちゃん、き、きらい——」

「すげえ鈴さん、超正論だ、と皆が頷く。

「き、君らは！ こんな騒ぎをしておいて——」

鈴の言葉を聞いて、ヨシナオが反応するが、

「ヨシナオ王。女人の人を泣かしておいて、いいわけですか？ みつともない」

「ノ、ノア殿」

泣いている鈴を抱き上げて、ヨシナオから少し離れた位置に移動したノアが罵倒する。鈴が泣き止むようにあやしながらヨシナオを見る。

「貴方の民が、貴方のせいで泣いてしまったのですよ。ヨシナオ王、貴方は武藏の民を愛しているはずだ。例え一人でも悲しい思いを……泣いている人がいれば手を差し伸べるのが王、周りを人一倍気にするのも王、そういうものではないですか？ 貴方はそういう御方だ」

ノアの言葉を聞き、何かを思ったのか、ノアと鈴の前で軽く片膝を落とす。

「驚かすつもりはなかった。許されよ。そしてノア殿、あなたの言葉に心打たれた。そなたが言う王に私はなる努力をしよう」

そういうと背を向けて歩き出した。

「後日、主犯であろう総長兼生徒会長に事情を聞きに行くと伝えておいてくれ」

ヨシナオはそれだけ言つて帰つて行つた。

「あれー、さつきベルさんの声が聞こえたような気が？」

校舎の窓から勢いよく、トーリが顔を出してきた。

「ヨシナオ王が来たけど、帰つてしまつたよ」

「マジで！ 麻呂が来てたのかよ！」

「鈴さんも無事だから、トーリもこつちに来なよ」

「ちよつと待つてろよ、すぐ行くぜ!!」

校舎内から走つてきている音が聞こえてくる。

「鈴さん、すいません。私が水を汲みに行けば怖がらせることもなかつたのに……」

「鈴を抱きかかえているノアは、申し訳ない気持ちで鈴に謝つた。

「ち、違うよ、わ、私が、弱い、から」

「そんなことないよ、鈴さんは強い子だよ」

「ありがとう、と言う鈴。

「もう少しこのままでいいようか」

ノアの言葉に頷いて抱きつく鈴。

「まるで兄妹みたいですね」

「まあ、ノアはお兄ちゃんっぽいところもあるしね」

「そうそう、小等部のときに後輩や先輩に『お兄ちゃん』『お兄様』『兄者』『兄貴』

とか呼ばれてたたしね」

「あ、あつたわね、そんなのも」

「ノアさん、小さい頃から大人の雰囲気がありましたもんね」

浅間、直政、マルゴット、ナルゼ、アデーレが二人の光景にを見て、各々言う。

「――！」

鈴が突然両耳に手を当てた。鈴の行動にすぐにノアが反応した。

「皆、膝をつけ」

鈴を驚かせないよう周囲に伝え、行動させた。ノアの言葉に皆も反応し、校舎から出てきたトーリもすぐに反応していた。誰も彼も鈴を中心に置き、膝を突いた。

「——あ、あつち」

鈴の指を指した方角に全員が向いた。

向いた先には山があり、闇がある。夜なので先の見えない暗闇が続いていた。だが、突如として暗がりの中から照らす光が生まれた。

発光の光。炎だ。

「あれは、爆発じゃないかね」

直政がつぶやいた直後、遠くの方から轟音が聞こえてきたのだ。この音から察するに爆発音だろう。

「あのあたり……三河を監視する番屋の辺りじゃないかな」

ネシンバラが眉を顰めながら言う。

「ノア君、大丈夫?」

皆が番屋の方を向いていたが、鈴は音でノアの呼吸音が変わったのに気付いた。鈴の言葉に皆がノアの方を向いて心配した。

「顔色が悪いで御座るよ」

「大丈夫かい、気分が悪いの？」

点藏、ネシンバラの二人が心配している。
「少し嫌な気配がして、それに胸騒ぎがしてね（何だこれは……体の中から込み上げてくる、この感じ）」

胸の辺りを押さえて、ぎこちなく笑つてみせるノア。そんな彼の笑みに皆は不安を感じた。

「大丈夫なんですか!?」

「問題ないよ。ただ気になつただけだよ（なんなんだこれは）」

浅間が心配そうに近づいて支えてくれる。だが、ノアの言葉には何時もの余裕さが感じられないのを皆は察した。

「よし、気になるなら行つて来いよ！」

「トーリ？」

「もう解散するつもりだつたし、エロゲやりたいし、気になるなら行けよ」

ノアが一人で何か悩んでいる所にトーリガ後押ししてくれた。本音も多少入つているが親指を立てながら言つている。

「わ、私も、もう、大丈夫、だ、だから」

鈴が言う。

「でもちやんと帰つてきなさい！　でないと、オ・シ・オ・キ・よ」

「鈴さん、喜美」

皆が頷き答えた。

「ありがとうございます」

頭を下げて礼をするノアは、皆に背を向けて移動しようとすると。

「トーリの告白の後に、私のことを全て話します。私がいなかつた四年間のこと、私の過去、存在意義を」

それだけ言うと跳躍し、階段を下りながら三河方面へ跳んで行き、皆の前から姿を消した。

「ようやく聞けるんですね」

「そうね。かたく頑なに拒んでいたものね」

浅間、喜美が見えなくなつたノアの方を見て言つた。

「そうだね。ノアの奴、私達がどんなことしても口を割らなかつたしね」

「そうだよね。ノーちゃんがお風呂に入つている時に全員で乗り込んで、お色気攻めしながら聞こうとしたのに全く効果なかつたもんね。逆に食べられちゃつたし」

「そんなこともあつたわね。あと、媚薬が入つてゐる料理をご馳走して、はかせようとし

てもケロツとしてたもんね。逆に私達にも食べさせてきて大変な目にあつたわね」

直政、マルゴット、ナルゼの三人もノアの消えた方を見ながら言つた。
「やつと、は、なしを、聞ける、ので、わたし、嬉し、い、です」

「ノアさん、私達には嘘ついたことありませんしね」

鈴、アデーレの二人も言つた。

「ノアの過去か、アイツの金の出所が気になる」

「こんな時までお金のこと考えてるなんて、シロ君、素敵！」

シロジロ、ハイディの二人は、一応心配しているようだ？

「ノアも色々と苦労しているんだね」

「そうだぞ、余。ノアは色々と苦労しているんだぞ」

お前が言うな、と皆に言われる。

「おーし、続annisは今度な」

「ま、待つて！」

トーリが一言かけて解散させようとしたが、鈴がそれを遮つた。

鈴が大きな声を出したことに皆が驚き目を見開いて動きを止めた。

「あ、あれ……、その」

皆は鈴の指した方向を見た。そこにいるのは一人の少年。

「——余？」

東は、鈴に指されたことに首を傾げた。

「ええと」

服を見て、頭、胸、腰を見て、確認する。

何故そんなに見られているか、分からぬ東は、もう一度自分の体をくまなく見た。

「余！ そつちじやなくて！ 後ろ！ 後ろ！」

「後ろ？」

言われ問い合わせた方向に顔を向けた東は、まず一つのものを見た。こちらの制服をの後ろ裾を握った小さい手だ。

白くて長い髪を乱した、白い肌の少女。東の知らぬ子だ。

慎重が一メートルに満たない子供の身体は、半ば透けていた。

「パパ、いないの……」

少女が口を開いた。そして俯き、

「ママ、見つからないの……」

迷子か、と思つたが、それより先に言うことがある。

その一言を東の代わりに皆が叫んだ。

「で」

息を吸い
「出たあーー!!」

第七話 宿命

ノアが爆発した付近まで移動している最中に立ち止まり、気になつていることを確認していた。片膝をついて地面に手を着いている。

「(地脈……流体が新名古屋城に集束されていく)」

手から伝わってくるものを感じている。地面より深い底にある地脈を感じていた。先程までの胸騒ぎの理由が分かった。

「とりあえず新名古屋城に向かつてみますか」

木の上に飛び乗りながら木から木へ移動するノア。

「花火ですか……」

闇の中を飛び移りながらポツリと漏らした。

「これは!」

ノアが移動しながら新名古屋城に向かつていると名古屋の街道に三征西班牙の武神と陸上部隊が倒れていた。武神は膝を着いて動かない物、二脚を斬られている二体が倒れており、陸上部隊の誰もが片膝を斬り割られている。

陸上部隊とは別に治療しながら撤収部隊と思しき者達に担がれて撤収している。その部隊を指揮している両の義腕の少女に見覚えがあつた。

「闇ではないですか!」

「え、ノア様!」

闇と呼ばれた少女は、両腕にそれぞれ武神の乗り手と陸上部隊の一人を担いでいた。

「久しぶりですね」

「四年ぶりですね。それはさておき、何故此処へ?」

「流体が集束してゐるのを感じてね」

「四年ぶりですね。それはさておき、何故此処へ?」

「ノア様だから出来る事ですか、と呟き、自分自身に納得させた。
「闇がいるなら、立花宗茂君の方もいるのかな?」
たちはなむねしけ

T e s. と言い、目線を新名古屋城に向けた闇。

闇の視線の先には、長身に短い金髪、衣服は三征西班牙の主教導院であるアルカラ・デ・エナレスの校章が刺繡されている。そして彼の右手に持つ物は――

「悲嘆の怠惰ですか」

T e s. と答える闇。三征西班牙に預けられた大罪武装の一つ。

「そして相対しているのは――」

「T e s. 東国無双 “本多忠勝” 様、そして自動人形 “鹿角” 様が立ちはだかっています」

大罪武装の所有者から正面には一人の中年男性、そしてもう一人、女中の格好をした女性が男性の首に手を回して掴まっていた。

「鹿角さんを負傷させるなんて、いい腕してますね」

「西国無双である宗茂様にとつて造作もありません。（ですが、ノア様が言えたことではないでしょ……）」

宗茂の実力に賞賛するノアに闇の方も表情を変えずに答える。

「もしかしたら、私より強い『そんなことはありません!! 父より強く、私より強い貴方様が……』昔の話ですよ、確かに道雪さんには色々とお世話になりましたね。闇も昔は私と一緒によく鍛錬しましたね。強くなつたようで嬉しいですよ」

ノアが話をしている最中に闇が声を張り上げて否定した。クールな表情をしている

闇が表情を崩してまで声を出し、悲しそうにしているのをノアは気付き、頬を触れながら優しく彼女に喋りかける。

「色々と話をしたいのですが、また後にしましよう」
「T e s. 宗茂様をお願いします。また後でお会いしましょう」

まだ一人は話をしたかったが状況が状況あ上に、元信が喋り出したのが気にもなった
二人はそれぞれの行動を始めた。

闇は負傷者を運び、ノアは元信の元へ。

ノアが闇と会う遙か前……

新名古屋城に向かう一直線の橋の上で体格のいい男性が侍女服姿の自動人形を抱えながら、全長五メートルほどの砲筒の武器を抱えながら戦闘体勢のまま睨みあつていた。

体格のいい男性は東国無双と呼ばれる猛者『本多忠勝』である。神格武装『蜻蛉切（とんぼきり）』を構えながら目の前にいる若者のことを観察していた。忠勝の首に手を回して抱きついでいる自動人形は本多家付自動人形『鹿角』であつた。彼女は忠勝と相対している人物の攻撃を受けてしまい、下半身が吹き飛んでしまい上半身だけは無事であつた。

そして本多忠勝と相対している人物は、三征西班牙の主教導院アルカラ・デ・エナレスの第一特務『立花・宗茂』（たちばな・むねしげ）、『神速』ガルシア・デ・セヴァリヨスを二重襲名している人物であつた。そして彼の持つ剣砲型武器は大罪武装の一つ『悲嘆の怠惰』を預かる、八大竜王と呼ばれる者の一人でもある。

お互に距離を取りながら相手の動きを伺つていながら、宗茂は投降をするように勧告をしつつ何時でも仕掛けられるように準備し、忠勝は何時でも迎撃が出来るように構えている。そして忠勝は投降勧告を無視しつつ交戦を開始した。速さでは宗茂が上回るが戦闘経験の豊富さと長年生きてきた勘で宗茂の猛攻を無傷で闘つていた。そして一時的に二人は距離を空けた。

「いい腕前だ」

「『東国無双』の貴方に言われるのはありがたいですが、こんな状況で言われても嬉しくはないです」

違ひね、と言う忠勝。

「先ほど、飛來した弾丸のような力場を左手から入れ、重力制御の連続操作で何とか横に逃がしましたが、あれは一体——」

「大罪武装『悲嘆の怠惰』の超過駆動つてやつだ。——ボウズ、使えるのはどのくらいだよ」

「——T e s.」

答えたのは、宗茂の声だった。

「私の適応力では、一度に五十パーセント前後が限界です」

宗茂がゆっくり立ち上がりながら、荒れていた息を落ち着けながら、

「投降を、御願い致します」

「お前、それだけ息切らしておいてよく言えるなあ」

「今のは、準備が甘かつただけです。かわすことが出来るのは解りました」

宗茂は言った。

「投降を御願い致します。そして地脈炉の暴走停止に御助力を。そうでなければ——」

右手、『悲嘆の怠惰』の剣を下段に構え、

「次には私もこれを用います。そうすれば貴方の負けです。——意味は解るはずです」

「だろうなあ」

忠勝が笑つた。

「だがよ」

忠勝は言う、背後を顎で示し、

「三河の持ち主はそう思つてねえみてえだぜ。——見ろよ」

……え?

と思つた鹿角は腕に力を込めた。

忠勝の肩越しに、新名古屋城を見る。すると、一直線の街道の先。新名古屋城の西側門を見る。

大きな門だ。開いている。幅二十メートルほどの神木を使った一枚板の扉が左右に遣り戸が、完全に開き切つていた。

開口した西側正面口は、奥に存在する多重の隔壁扉も全開にされていた。一直線に、数キロに渡つて開かれた穴の向こうにあるのは、光と、

「……地脈統括炉」

鹿角の声が示すものは、数キロ先の新名古屋城中心に存在する壁のような木壁塊だ。

直径一キロほどの、金属内殻と、木製外殻に覆われた統括炉は、

「既に四方の抽出路の暴走が完成して、流体を蓄積中……」

鹿角の言う通り、統括炉の木製外殻は、鼓動に合わせて外殻材の隙間から光を放ち、また、時折わずかに膨張し、震えさえ生んでいる。

既に統括炉の周辺には、液体が光の霧状に変異し、天球図を書くように線円の無数列を重ねて作つて回っている。その巨大な光の天球図の中央からは、空に向かつて緩やかに光の塔が立ちつつあつた。

「——あの光の塔が全部内側に落ちたとき、統括炉ですらも許容出来なくなつた流体がオーバーロードを起こす、ってわけだな」

すると、忠勝の声に答える言葉があつた。それは新名古屋城の外部拡声器からの声で、

「その通りその通り。何とかここまで来たよ止めるならあと五分くらいじやないか？一体そこの立花君はどうするつもりなのかな？ 時間は有効に使つていかないとな」

声の持ち主の名を、鹿角が呟く。

「元信公……」

ああ、と応じる姿は、統括炉の前に立つていた。

松平家当主、元信だ。

学帽付きの彼は衣服の上に白衣を纏い、小指を立てた右手でマイクを握っている。そして彼は、マイクに対しても口を開くと、

「ようし、じゃあ全国の皆！　こんばんはあ――！」

息をつき、指を鳴らす。すると彼の横、撮影機材を持つた自動人形が現れる。

元信は、前に回った撮影の自動人形に対し、マイクを口元に当ててポーズを取り、「この放送！　共通通神帶ネットで全国に放送中だからね！　よい子の皆、ちゃんと先生の一

拳手一投足を油断せずに見ていいなければならないよ！　ではチャンネルはそのままで

！

息を吸い、

「今日、先生は、地脈炉がいい感じに暴走しつつある三河にきていまあーす!!」

元信、忠勝、宗茂の三人で会話をしていた。

宗茂は地脈炉を暴走させている理由、そしてなぜ三河は消滅させようとしているのかを問いただしている。

元信は末世について語る。宗茂に問い合わせ、末世について考えさせつつ、末世という危険性を世界に問いかけていた。

元信がこう問うた。

「危機つて、面白いよね」

元信は言う。

「先生、よく言うよね？ 考えることは面白いって、じゃあ、やつぱり、どう考えたつて
——危機つて、面白いよね？」

だつて、

「考えないと、死んじやつたり、滅びちゃつたりするんだなあ、——すつごくすつごく考
えないと解決出来ないと思うんだけど、それつてつまり、——最大級の面白さだよねえ
？」

「——

元信の言葉に、宗茂が息を飲み、何も言えない。

だが、元信はマイクを片手に、空いた手で頭を搔きつつ、言葉を繋げた。

「危機ってのはとても面白いものだ。だけど、もつと面白いものがあるよね？　ハイ、じゃあそこの宗茂君。もつともつと考える必要があるもの、答えて御覧？」

直後、宗茂が、大きな声で答えようとする。

「——解り 「末世まつせ」ではないんですか？　元信さん？」　だ、誰ですか？」

「遅いじゃないか、ノア君」

宗茂が声を出した瞬間に空からノアが舞い降りながら元信に答えた。急に現れた存在に驚きながらその人物の存在感に圧倒されてしまっていた宗茂。

ノアの答えに満足そうに頷く元信。

「招待状を貰つていませんでしたので」

「君なら気付くと思つてね。私の期待通りだよ」

いいかい？

「そう、ノア君が言つてくれた通り末世だ。——この世の滅び。それは全世界の生徒に対する最高のエンターテインメントだ」

宗茂は、元信の言葉に息を飲んだ。

……エンターテインメント……？

末世の話はいろいろな方面から聞いている。それがどうやら本当に起きる事であり、対策など何も打てていないことを。だが、

「面白いとは、不謹慎な……！」

「宗茂君、先生は眞面目な話をしているんだよ。も、すつゞく眞面目、先生は」
声が来た。歩き、鼓動の音と、音楽に合わせた声が、
「だが、此処まで来た宗茂君にはご褒美に教えてあげよう。末世を回避する方法を」
「なつ！」

「……」

それは、

「大罪武装だ」

元信は、宗茂の右手にある “悲嘆の怠惰” を見た。

元信は、宗茂が眉を歪めるのにも構わず、

「それだけではないが、今のところ、それが最も解りやすい。だからこう言おう。いいですか皆さん、大罪武装を全て手に入れたならば——」
一息。

「——その者は、末世を左右出来る力を手に入れる」
宗茂が叫んだ。

「大罪武装を各国に配つたのは貴方です！ それが、末世を払うために大罪武装を全て手に入れろと言うのは……、大罪武装を与えられた六つの国に戦争を巻き起こす氣ですか！」

「六つの国？ 違うよ？ 七つだよ？ ねえ、ノア君」

元信の告げた言葉に宗茂が動きを止めた。彼は眉をひそめ、横に立つ人物を見た。

「七つ……!?」

「……」

宗茂の視線を感じるが何も言わず瞳を閉じていた。

「おやおや、ノア君が言わないなら先生が言つちやうぞ。大罪武装は八つの想念がモチーフというのは確かだけど、でも、その八つの想念にも原盤とも言えるものがあり、——実は九大罪だつたらどうする？」

一息。

「八つの想念を論じたエウアグリオスは、実は、友人に對する書簡で九つの惡について述べているんだ。八つの想念に含まれていない、その九つ目が「嫉妬……」ありがとう、ノア君」

元信の言葉に割り込んだものはノアであつた。隣で驚いている宗茂を無視しつつ、元信を見る。

二人の会話の中に割り込んでくる者が現れた。

「『嫉妬』に当てられた魔獸は、——全 レヴァイアサン 竜だ!!」

K. P. A. Italia、教皇総長インノケンティウス……

ノアが割り込んできた人物の名前を口に出した。歯を剥き出しにしながらインノケンティウス叫んでいた。

叫ぶ先、表示枠の中で、元信が頷く。インノケンティウスは奥歯を噛み、

「——全竜とは、全ての化物の様相を持つ史上最大の竜! つまり貴様はこう言いたいのだな!? 九つ目、嫉妬の大罪こそが、全ての大罪をまとめたものであり、最高の悪徳なのだと!」

「そうそう、ガストリマルジア ポルネイア 暴食も淫蕩も強欲も悲嘆も憤怒も嫌氣も驕りも、何もを妬み、何かになりたいと願う思いの行き過ぎや、その反動によるものだよな」「ならば……、俺の大罪武装の追加発注が無駄だったとして……」

インノケンティウスが叫んだ。

「その『嫉妬』は、どこにある!」

「今、全竜は、既に存在している」

それは、

「噂を聞いたことがないかい?」

「……噂？」

「ああ、と元信が頷いた。

「噂はこういうものだ。——大罪武装は、その材料として、人間を使用している。ゆえに、人間の原罪をモチーフとした能力を使用出来るのだ、と」

そして、

「それは本當だよ?」

この雰囲気の中で元信が冗談を言えるかと言えば半分半分だが、この言葉には納得させるだけの重みがあつた。

「少し話をしようか」

元信はゆつくりと目を閉じながら語りだす。

「実はね。先生は一度だけ、『京』に行つたことがあるんだよ。そこで『帝様』に会つたんだ」

この言葉に全国で放送を見ている人達は驚きを隠せなかつた。

極東社会の精神的な統治者。神社組織の長でもあり現人神。俗世不干涉で、環境神群を介し地脈を制御しているとされる存在である。そして誰一人として帝のことを見た事はなかつた。性別も不明であり、帝の息子である東ですら親の顔を見たことないと言つていたのだ。

「本当に昔だよ。先生はね、そこで一人の少年を預かつたんだ。その子はね、とある事情で子供になつてしまつたという不思議な少年だつたんだよ。帝様やその子から説明を聞いた時は私ですら理解できなかつたよ。でもこれだけは分かつたんだ。これは非常に重要なことであり、私の使命だとね」

元信の言葉をただ聞くしかできなかつた。

「その子を預かり自由に育てたよ、そう、武蔵に預けてね。そして少年は一人の女の子出会つた。その女の子のことを妹のように可愛がり、本当の兄妹きょうだいにも見えたよ。このまま二人が育つていくのを見ていたかつたよ。でもね、それは叶わなかつたんだ。何故なら

——女の子は亡くなつてしまつたんだ。

「元信公、何故こんなことを……」

正純は、横にP—01sを置きながら、元信の言葉を聞いていた。

聞こえる言葉は、昼に聞いたこと、酒井やノアがこちらに告げたものと同じ内容だつた。

だが、今の正純はそれよりも気になつていることがあつた。

ノア、何でお前がそこにいるんだ――

昼まで一緒にいたノアが、地脈が暴走している三河にいることが気になつてしまふ。夜には教導院にいるんじやなかつたのかと。

「正純様」

「…………ん、どうした、P—01s」

「ノア様が心配ですか？」

正純は表情に出していたのに今気がついた。自動人形にも分かる程に正純は不安を隠せずにいた。

「心配していなないと言えば、嘘になる。心配だ」

「……」

P—01sに語りながら放送している表示枠を見る正純をP—01sは見た。

「P—01sに正純様が今抱えている感情は分かりません。けど……」「……けど？」

P—01sの言葉に疑問を思う正純はP—01sを一度見た。そして気付くのだつた。

——何故涙を流しているのか

自動人形であるP—01sには感情という物がないはずなのに、何故。

「今のノア様を見ていると——」

P—01sはそれから言葉を述べなかつた。

頼むから無事に帰つてきてくれよ。ノア。

元信は語る。

「不運な事故だつた。少年は瀕死の女の子を一生懸命に治療した。自分の力の限り、でも女の子は亡くなつてしまつた。そして少年に最後に一言述べて逝つてしまつたんだ」

——優しくいて

「少年は泣いたよ。瞳を閉じたままの女の子を抱きしめながら泣いたよ。体中に血が付こうが少年は女の子を抱きしめていた」

「……」

元信が語つているのを静かに聞くノアの表情は暗かつた。

「私の分まで泣いてくれたよね。ノア君」

元信が語つていた少年というのはノアであることを暴露する元信。

「そう、そして大罪武装は、人間の感情を部品としている」

それは、

「その人間の名は、ホライゾン・アリアダストという、ノア君の胸の中で息を引き取つた女の子だ」

『え……？』

武蔵にいる住人は聞こえた名に聞き覚えがあつた。

「ホライゾン、十年前に私が事故に遭わせ、大罪武装と化した子の名だ。そして去年、彼

女の魂に嫉妬の感情を込めて九つ目の大罪武装とし、——自動人形の身を与えて武蔵に送つた』

その自動人形は、

「P—01 sという名を持つて、武蔵の上で生活をしている」

武蔵にいる誰もが、次の言葉を聞いた。

「自動人形、P—01 s、その子の魂が、——『嫉妬』の大罪武装『焦がれの全域』そのものだ」

元信は一息し、

「これが大罪武装の正体と、九つ目の大罪武装の在所だよ」

「やはり……」

「そうだよ、君が思つていた通り、彼女がホライゾンだよ」

ノアが確信を持つて言つた言葉に頷きながら同意する元信は笑みを浮かべていた。

「——ど——し——」

小さな声でノアが何かを言つている。

何故。

「どうして、魂ある自動人形を、——大罪武装にした！」

「……」

叫ぶノアに對して誰も答えてはくれなかつた。元信も口を閉ざしている。ただ流れ
る言葉は、

「今日、ホライゾンを見たよ。……手を振つてくれていた」

一言

「ホライゾンは、元気なようで、……何よりだ」

元信の言葉を聞いて、武藏上を走り出した者がいた。それは、

「——愚弟!？」

トーリが速度としては並程度で、しかし彼としては全力で走り出していたのだ。
聞こえた事實に誰もが息を飲み、顔を合わせていた中だつた。

停止と戸惑いの雰囲気を断ち切るように、トーリは走る。学校前の階段を駆け下り、その最中に背後から喜美の声が、

「愚弟！ アンタ、どこ行くの!?」

だがトーリは答えない。ただ走り、息をつき、後悔通りにたどり着く。皆が、あ、と声を上げるが、トーリはわずかに迷い、しかし、

「——っ！」

勢いつけて暗い道へと飛び込んだ。身を大きく振り、速度を出来るだけ上げながら、「……！」

その、必死に走つていくトーリの動きに、皆の中から応じる者がいた。出る人影は三つ、ネシンバラとウルキアガ、そしてノリキの三人だ。

走り出し、一気にトーリに追いついていく三人に、数歩を踏んだ喜美が叫ぶ。「追つて！ お願ひ……」

喜美の声は三人に届いたはずだが、心配そうな表情を変えることはなかつた。

「ノア君、か、悲しん、でる……」

三人の後ろ姿を見ていた喜美の背後から声がした。

「鈴さん」

涙を流しながら立っている鈴が居た。涙を拭いながら立っていた鈴だったが座り込

んでしまつた。

そんな鈴に直政とアデーレが近寄つた。

「トーリくん……ノアくん……」

浅間は、喜美の隣に移動し、彼女の肩に手を当てながら心配そうに表示枠を見た。

「愚弟……ノア……無事に帰つてきて」

小さな声で喜美が言葉を出す。隣にいた浅間には聞こえていたが、他の人達には聞こえてはいなかつたようだ。

「私の下まで来てくれば全ての答えを教えよう、ノア君」
正面には忠勝がいる。その遥か向こうに元信がいる。

「宗茂君、協力してくれるかな?」

「元よりそのつもりです」

悲嘆の怠惰を持ち直し構える宗茂。

「さあ、世界大戦が起きるかもしれないし、責任所在の問題で、今度こそ極東は完全支配かもな。そしてもしそうなつたら、手引きは先生のせいにされるんだろうなあ」

逆光を置いて、元信がマイクの声を作った。

「だが、見たいよなあ。——史上初の、聖譜記述にも無い世界大戦つてのを」

元信の言葉に、宗茂とノアは唸りをあげ、

「止めます!」

「いいなあ! そうだよ二人共、いい答えだ!!」

構えを深くした宗茂に対し、元信がのけぞつて声をあげる。

「そうそう、ノア君には特別に相手を用意してあるからね。宗茂君は、そこの副長と戦いなさい」

元信の言葉の直後、宗茂とノアは風を感じた。威圧の、押すような風を。その発生源は、

「本多・忠勝……!!」

「おうよ、若の相手はアイツ等だがな」

首から自動人形の身を提げた武者が立っていた。

忠勝は後方を顎で指した。

「なっ！」

宗茂が驚きの声をあげた。

忠勝の後方にある建物の中から巨大な物が次々と飛び出てきた。

巨大な羽、手には巨大な鋭い爪、体全体を金属の装甲で覆つており、巨大な竜型の機械が現れたのだ。

「私が作り上げた機竜だ。私の言うことを聞く自動機竜とでも呼ばうか、大きさは航空艦で例えるなら、ドラゴン級からヨルムンガンド級までいる」

宗茂とノアの視界全体に凄まじい数の機竜で埋め尽くされていた。新名古屋城から光を遮る程の数だ。

「さあ、私にノア君の本気を見せてくれ。そして私の下までたどり着いてくれ！　この二万の群れを搔い潜つて！」

盛大に腕を広げながら目の前の光景に笑つてみせる元信。

「宗茂君、忠勝さんはお願ひします。私はこちらをやります」

そう言つて、ノアは一步前に出て、機竜に向かおうとする。

「ちょ、ちょっと、貴方一人では無理です」

「いいえ、大丈夫ですよ」

「何も持たずに素手で、挑むつもりですかッ!?」

「だから大丈夫です。武器ならちゃんとありますよ」

「何処に!?」

宗茂がノアの肩を掴んで、止めようとするが、その前にノアが既に行動していた。
地脈が暴走する音や機竜の雄叫びが響くのに関わらずノアの声は忠勝、元信、放送している画面の向こうにいる人達にまで聞こえていた。

——ここに神の子 顕現せり——

彼の言葉と同時に彼の左手に光が集まっていき、何かを形成していく。

眩い光が收まり、彼の手には一本の槍が握られていた。

彼の髪と同じ黄金の光を放ち、一目見ただけで鳥肌が立つてしまい、間近にいる忠勝、宗茂は、槍の異常性を肌で感じていた。

あれは、常人が持つていいものではない。
あの槍は一体何なんだ。

「^{ロングィヌス・ランゼ・テスマント}
聖約・運命の神槍」

ノアは左手に持つ槍を一瞬だけ見つめ、機竜の群れへ向けた。

「宗茂君、どちらが先に地脈炉を破壊できるか、競争だ」

「……武藏アリアダスト教導院、副長の力を見せてもらいます」

二人はそれぞれの敵に駆け出した。

第八話 黄金

三河からの放送を見た人々は驚きを隠せぬにはいられなかつた。

総長は無能、副長は優秀という認識を持っていた極東以外の人々は副長の認識を変えざるおえなかつた。

優秀という言葉で表すには言葉が足らなかつた。人としての超越者、超人、黄金、彼を言葉で表すには言葉が足りない。

ただ、目の前で起こっている真実からは目を背けられずにいる。

放送画面全体を埋め尽くす数の悍ましい敵に対し、たつた一人で戦いを挑み、次々に撃退していく姿に目移りするしかなかつた。その光景は美しくもあり、とても残酷であつた。

闇の中を照らす光であり、彼から目を離すこともできず時が過ぎていく。

”栄光丸”艦橋。中央に立つ白の教皇衣は、放送されている画面に叫んだ。

「——まさかッ！　あの服装！　あの槍は——」

教皇総長インノケンティウスは、自分が座る椅子から立ち上がり驚きを隠せずにいた。

「間違いない。黒を強調したマントに黄金色の髪をなびかせ、金色の槍を持つ——」
画面場を見ながら言葉を述べる。

「南北朝戦争、レパントの戦いに姿を現した——」

——闇を照らす者。

「やはり生きていたのか」

武蔵にいるメンバーもノアの本気というのを見た事は無く、何時にもまして黄金率が増している状態、金色の槍など分からぬことで一杯で混乱していた。

「あ、あれが副長の……ノアさんの本気」

アデーレが静まりかえっていた空間で呟いた。

「の、ノア君……」

「……（あの光、何処かで見たことがあるさね。思い出せない）」

怯えている鈴を左腕の義腕で優しく包みながら落ち着かせて、右手で顔を隠しながら何かを考えている直政がいる。

「……」

「シロ君」

シロジロとハイディは寄り添いながら、画面の中にいるノアを見ていた。

「ノアくん、お願ひだから無事に帰ってきて……」

「ノア、貴方……」

浅間と喜美もただ祈るしか出来なかつた。

「ガツちやん……」

「アイツが、ノアが約束を破つたことないでしょ？」
手を繋いで画面を見続けるナイト、ナルゼ。

機竜の大軍に立ち向かう者がいる。
大軍の中で一際に輝く存在がいる。

機竜の攻撃をものともせず、金色の槍を振るいながら、前に前にと進んでいく。
一振りすれば無級、ワイバーン級の機竜が絶命していく。
ドラゴン級も彼の前では全くをもつて無力であつた。一振りで首を切断され、二振り

目で体が半分に切斷される。この繰り返しをしていく。

減つているとは感じているとは思うが数が多い上に、次から次へと排除しようと立ち向かってくるのであまり実感が湧かずについた。

「(キリがないな)」

飛んでいる機竜を次々と落としていき、その機竜を足場にして次の機竜へと向かっていく。

ノア自身の術式で浮遊することが出来るようだが、燃費が悪い為に控えている。

「元信さん、こんな戦力があれば国取りできますよ」

ノアの視線の先は統括炉の前に立っている松平元信を見ていた。

ノアの言葉に軽く笑い答える元信、

「この大軍はそんなことには使わないよ。君の為に使うために用意したんだよ」

満面の笑みで、さも当然のように言つてのける元信。

「(……流石にもう時間がないな)」

これ以上の時間の浪費は地脈炉の破壊に支障が出ると感じたノアは動いた。

一瞬だけ地上の戦況を見たノアは、忠勝と宗茂の戦いが拮抗状態、いや経験の差が響いて忠勝の方が優勢であると踏んだ。

「まずは目の前のこいつ等を駆逐する」

言葉とともにノアは浮遊し、槍を両手で持ち前に掲げた。

何かを祈るように唱えるように空中で浮遊して静止しているノアは無防備であつた。

そんな無防備な状態のノアを放つておく訳がない機竜達は、背中や腕に付いている武装でノアに一斉に攻撃をしてきたのだ。

大砲、ミサイル、槍などを一斉に射出して、彼一点に攻撃を集中させ、排除しようとしている。

だが、ノアは機竜の行動などものともせずに態勢を崩さずにいた。迫りくる凶器に怯えも動きもせずにいた。

「——傲慢^{プライド}」

直撃する、と誰もが思つたその時、一瞬彼が小さく誰にも聞こえない程度に呟いた。
その直後、彼に無数の攻撃が直撃し、彼の姿が見えないぐらいに直撃時の煙が散布していた。

共通通神帶から全国で見ていた者達は、酷く残酷なビジョンが脳裏を過ぎる。
彼が血塗れで煙の中から落ちてくるのだと。

その中でも武蔵勢の衝撃は大きかつた。梅組メンバー全員が顔を真っ青にして今にも泣き出しそうにしていた。

だが、そんな想像など無価値であつた。

煙がゆっくりと晴れていく。

——なんだ、アレは

煙が晴れて姿を見せたノアは無傷であつた。

常に輝いて見える彼がさらにその輝きを増して存在していたのだ。

容姿から“黄金”と言われている彼の存在感が増幅している。槍からも今までとは比べられない程の光を放つている。

「……流石だね。あれだけの攻撃を無傷でいるなんて、それもその槍の御蔭かな？」
まるで予想していたように言つて来る元信は分かつていた。

「その神器じんぎの力はやはり凄いね！」

元信が発した言葉は全国の者に衝撃を与えた。

神器とは京で帝が所持しているといわれている重奏神州コントロールするために作られた三つの神器である。

「先生はこれを機に君の全てのことを話そうと思つてゐるよ」

次々に言葉を述べていく元信。

「三つの神器を作つた君なら自分の神器を作るのは容易いものね」

また驚かせることを言う元信。

この世界を保つために必要とされている神器を彼が作つたと述べた。

「その槍は君の最高傑作であり、最強戦力でもあるもんね。なんせ——」

——神格、聖譜、大罪、それぞれの武装の元となつた槍なんだから

今度の今度は信じられないことを述べる元信。

ノアが手にしている黄金に輝く槍は各国が保有する神格武装、聖譜顯装、大罪武装の原点になつたモノであるという。

「聖約・運命の神器は先生の頭脳を持つてしても全てを分析できなかつた。だが、その槍の中には膨大な力が眠つてゐるのは分かつた。その一部である技術を大罪武装として先生は作つた」

「……大罪武装を作るまではいい。だが、その大罪武装がホライゾンの一部であるとい

うのは気に食わない！」

ノアは周りにいる機竜を先程の倍の速度で殲滅していく。

「今の君は”傲慢の光臨”を最大限に生かしているつてところかな」

六護式仏蘭西の総長連合総長のルイ・エクシヴが持つ大罪武装”傲慢の光臨”的超過駆動をノアは使用していた。

「はは、出力も桁違いいじやないか！」

”傲慢の光臨”的超過駆動の効果は「所有者が誇りを保つ限り、当人の力を無敵にする」というものであり、大罪武装は出力が低く作られている為に原点であるノアが持つ槍には到底勝てない程の出力を誇っている。

ノアは今では機竜の攻撃を避けることなく、受け続けて、機竜を絶命させている。真っ向から突き刺して行つている。

「スロウス
怠惰」

前方から一斉に襲い掛かつてくる機竜の群れに向かつて、小さな声で発し、槍を一振りした。

その一振りからは黒い手のような攻撃が発生し、機竜の群れを削ぎ落としていく。

体ごと消えた機竜、体の一部を削られて上空から地表に落ちていく機竜、一振りで五千もの機竜を屠った。

「おおおっ!!、次は”悲嘆の怠惰”の超過駆動かい。しかも”悲嘆の怠惰”、”傲慢の光臨”を同時に発動させるなんて、やはりノア君は最高だよっ!!」
興奮が收まりきらない元信は、まるで初めて玩具を買つてもらつて喜ぶ子供のようにはしゃいでいる。

迫りくる死の恐怖など知つたこと無く、実際に槍を振るうノアに鳥肌が立つてしまつていた。

そんな元信など気にすることなく、さらに機竜の数を減らしていくノア。

「——形成」

機竜の距離を取り、槍を一振りし右手に持ち、呟いた。

その瞬間、眩しすぎるほどの光を槍が放ち、画面を見ていた者達は一瞬だけ目を閉じてしまつっていた。

光が收まりはじめ、画面に再び視線を戻すと彼の槍が剣に変化していた。

刀身は三尺余りぐらいであり、剣が光を放ちながら彼の手に握られていた。

槍のような禍々しさがなくなり、逆に『美しい』と感じてしまう程の魅力を放つている剣だ。

この剣を見たとある人物二人が反応を示していた。一人は玉座から立ち驚きを隠せずにおり、もう一人は自室で只々驚いていた。

「……ノア君、流石の先生でもそれは予想外だな」

ははは、と笑いながら新しい発見に高揚していた。君はまだまだ、隠し事が多そうだ、と内心で思いながらノアの戦いぶりを見る。

普通なら変化があつた敵に対して警戒するものだが、機竜にそのような思考はなかつた。

ただ指示されたことを遂行するため、目の前の敵を殺す為に生まれた機竜達はノアに突撃していく。

そんな機竜を見ながらノアは剣を両手で持ち難ぎ払つた。

「——^カ_リ勝利すべき黄金の剣」

彼の言葉と同時に光り輝く刀身が伸び、機竜の群れを難ぎ払つていった。

横からの一閃になすすべなく切り払われていく機竜。

上半身と下半身が別れ、切断部分から体が跡形もなく消滅していくのだ。触れたモノを全て薙ぎ払っていく。

全てを蒸発させていく黄金になすすべもなく消失していく機竜。

「なるほど、英國の”エクスカリバー王陽剣”かい。槍の中に内包されていたのかな」

元信が先ほど言つたことが本当であつたことが本当であつたことが証明された。

——英國の神格武装である王陽剣もノアは使つてみせたのだ。

「視野に映つた機竜が全て薙ぎ払われてしまつたが、一体どれくらいの射程があるんだい？」

「……」の三河から英國までは届く

元信の問いに静かに答えたノアに対して元信は笑い、画面越しから見ていた人達は絶句していた。

三河から英國までどれだけあると思つていてるだ、と内心で信じ切れず驚いていた。
「おやおや、先生が用意した機竜があと一匹に!! なんということだあ！ 淫いでノア君!!」

嬉しそうに言葉を述べる元信は焦る様子もなく言う。

「最後の一匹はとつておきだよ！ ヨルムンガンド級の機竜だあつ！！」
ノリノリで言ってくる元信が空に向かつて指をさした。

月の光が照らしていたはずの三河に暗闇がやつてきた。機竜が月の光を塞ぎ、羽を大きく広げ立ち塞がっていたのだ。

「さあ、先生にノア君の力をもつと見せてくれ!!」

子供のようにはしゃぐ元信を尻目にヨルムンガンド級の大きさで凶悪な爪で勢いよくノアに襲い掛かろうと迫つてくる。大きさが大きさなだけに威力も桁違いだろう。

だが、ノアは空中から動く気配がなかつた。まるで先程のように受け止めるようであつた。

そして凶悪な爪が容赦なくノアに直撃し、物凄い轟音が三河、武藏、画面外の者達に響いたのだ。

——え

誰もがそう口にしていた。
確かに轟音が響きまわつた。

だが、その音は金属と金属がぶつかり合う音であった。
もつと大地を削るような轟音や雷のような轟音が響くと思っていたがその予想は外
れていた。

何故なら……

——その場から動くことなく片手で持っていた剣で巨大な機竜の爪を受け止めていたのだ。

確かに彼は受け止めていた。その証拠に受け止めた直後に彼の背後に物凄い突風が舞つていたからだ。

「……」

元信も流石に啞然としている。

機竜の方も受け止められてからずつとノアを動かそうと力を込めているのに関わらず
ぴくりともしない。

まさに不動であつた。

「これで終わらせる！」

ノアが言葉を発した瞬間、均衡を保つていたはずの機竜とノアの爪と剣のぶつかり合いが一瞬でノアが機竜ごと上空に押し返したのだ。

叫び声のような咆哮をあげる機竜に対して、ノアは両手で剣を持ち、叫んだ。

「——約束された勝利の剣」

一層輝きを増した剣が機竜に振るわれ、黄金の光が機竜を呑み込んだ。

ヨルムンガンド級の大きさであるはずの機竜を光が呑み込み、光が空高く伸びていく。

世界中の者達が画面から目を離し、空を見た。

光の光線が伸びた先には放たれた光が収束し、夜空を照らしていた。夜を照らす太陽、三つめの月、と明るい光が世界中の者達に目撃される。

光が収束していき、空に視線を移していた者達は画面に視線を戻すと明らかにノアに変化があつた。

彼の綺麗な金色の髪が変化していたのだ。

腰の辺りにある髪が一部だけ黒髪になつていたのだ。

「やはり、それ程の力には代償があるのかね？」

『ツ?』

元信の言葉に驚く。

今までが今までに当たり前のように彼が力を使っていたので気付かなかつた。
「……」

「沈黙は肯定と思つていいんだね」

悲しそうな表情でノアを見ている元信。

「ノア君が無理する必要は本当にはないのにね……」

「……では、投降してください」

「それはできない」

ノアが投降を呼びかけるも拒絶する元信。

「なら止めます。まだ時間はある」

元信の決意が揺るがないと分かつたノアは当初の予定通り流体を抽出している抽出炉の破壊を決意するノア。

「まだ無理をするのかね、ノア君。無理はいけな——ツ?！」

元信の言葉を耳にとめながらも、手に持つ剣を両手で持ち、先程と同様に”約束された勝利の剣”で抽出炉の破壊をしようと構えるのであつたが、背後からノア自身得体の知れない悪寒を感じ、早急に振り返つて見ると――

「何故このタイミングで現れるんだ」

絶句してしまつた元信は目の前の現象に驚きを隠せないでいた。

——公主様

ノアの背後に蒼い炎が現れて、彼が消えてしまつた。
めのま

その場に残るのは蒼い炎で描かれた二境文。
そして——”遊ぼう”という文字だけであつた。

第九話 月下の終わり

三河の事態は、現段階も全国放送されている。

そして全国の人達が目の前で起こつた事に驚愕し、恐怖した。

武蔵の副長が圧倒的な力を振るい、戦っていたにも関わらず、ソイツは彼の力など御構い無く、彼を消し去つた。

彼が居た場所には蒼い炎と共に二境文が描かれ、空中に文字が残されていた。

——遊ぼう

ただそれだけが残されていた。

唖然としているのは三河で騒動を起こしている元信もだつた。まさかの事態に動揺を隠せずにいた。

武蔵のメンバーもそれぞれ悲鳴にも似た声を上げている者、目に涙を浮かべる者、目の前の事が信じられずに肩を震わせる者。

だが、そんなのも束の間、轟音と地震が三河を襲つた。

画面上から見ている者達も物凄い轟音が響いたのに驚き、画面を見続けている。

元信は轟音のした方角に視線を向け、またカメラを向けさせた。

『なあッ!?』

誰が発した言葉か分からぬが画面を見ていた者、武蔵から見ていた者は仰天していった。

三河近くの山が不自然に削れ、削れた山の向こう側から金色の光が漏れているのだ。夜ということもあって、分かり易いぐらい見えており、その光は先程ノアが放つていた黄金の光に似ていた。

山の向こう側がどんな状況か、現段階では分からぬが、落ち着いているとは到底いえないと爆音のような音が聞こえてくるのだ。

明らかに誰かが戦っている。

あの光を放てるのは現状で考えられるのは、先程まで居たノア以外考えられなかつた。

光が出ていた方向を見ていると徐々に光が収まっているのだが分かつた。少しずつ弱くなってきた光が見えなくなつた。

それと同じくして新名古屋城から伸びていた光の塔が全て消え去つた。地震のような振動が止み、光も消え、何時も通りの三河に戻つたと思えるぐらい静かであった。

「しくじりました」

光が見えていた山の方に視線やカメラが向いており、突如として新名古屋城に通じる橋から声が聞こえた。

全国で見ていた者が聞き覚えのある声に驚く。

全視線がそこにいる彼を捉えた。

——ノア

公主隠しにあつた筈の”ノア”が膝をついていた。

そして先程とは違ひ、黄金の槍や剣など持つておらず、無双していた彼とは思えない程にノアは傷ついていた。

綺麗な金色の髪以外全てに彼の血が付着していた。武藏アリアダスト教導院の服は白い生地の部分が全て真っ赤になつており、黒い生地の部分も血が付いたであろう跡が

付いている。頭から流れる血のせいで瞳が血の色で染まっている。口からも血が流れている。

髪も肩の部分まで黒髪になつており、先程よりも浸食が進んでいた。
「……まだ」

血塗れになりながらも立つノア。震える脚を殴つて無理矢理立つ。

「まだ間に合いますよね」

ゆっくり立ち上がるノアの体からは血がポタポタと垂れ、彼の足場に血の池を作る。

「君はまだ無理をしようというのかい？ そのままだと君——死ぬよ」

元信は断言した。あの血の量は危険だ、と

「……もうでもしないと元信さん止まらないでしよう」

確かにね、と笑う元信は思う。

諦めが悪いのは昔から変わらないな、と

「でもね、君を失うのはこの世の損失だ」

言葉をつづける。

「それによア君に術式を使い続けさせるわけもいかない——」

——だから副長、ノア君を倒してくれるか

元信の言葉にその場から飛び退くノアであつたが、それが失敗であつた。

「眠つてもらうぜ」

飛び退いた先に壁が現れ、その壁に反応できず激突してしまい、衝撃で一瞬だけ思考が意識できなくなつてしまつていた。その隙を本多・忠勝は見逃さなかつた。

宗茂と戦つていた忠勝がノアの首元に刃先の部分ではなく棒の部分で殴打したのだ。

連戦に及ぶ連戦で疲労が出ていたノアは完全に力を出せはしなかつた。

忠勝の攻撃をまともに受けてしまつたノアは橋の上に沈んだ。

「忠勝様、急ぎませんどこの場所も危険です。ノア様を退避させねば」

忠勝の首元には鹿角がいた。先程のノアの前に壁を作つたのは彼女の重力制御によるものだ。

「静かになりましたね」

橋の上に新たに新しい人物が現れた。

忠勝に倒されて氣を失つている宗茂の隣にスッと現れ、氣を失つている宗茂の頬を優しく触り、忠勝の方に向いた。

忠勝の近くで氣を失つて倒れているノアの方を一目だけ見た後に両義腕の少女は、目

の前にいる武人と自動人形を見た。

「どちらが勝利を？」

「我的勝ちに決まつてんじやねえか、立花・闇」と、ややかすれた声で、忠勝が言う。

「立花・闇、立花・道雪の娘ですか」

忠勝の言葉に鹿角が反応し、応えた。

「地脈炉は壊れてねえ、それに二人は地面に沈んで、我はこの通り立つている」

指で二人の事をさしながら忠勝が言つた。

「ノア様には不意打ちで、尚且つ私の重力制御のおかげでもありますのに」

鹿角が忠勝の言葉に対して口を挟んだ。

「おま、我が勝利に浸つてゐるのによ」

「立花・宗茂様だけならまだしもノア様も全快の状態で戦つていましたら負けていましたよ」

「勝ちやいいんだよ！」

だが、その通りだ、と悔しそうに頬をかきながら忠勝は鹿角の言葉を認めた。そして闇の方を向いて言つた。

「お嬢ちゃん、早く二人を連れて帰りな。今は崩壊の直前のわずかな静けさつてヤツだ

が、すぐにここは消えるぞ」

「では、忠勝様達も——」

忠勝の言葉を理解し、彼らと一緒に退避しようと言おうとした闇あつたが忠勝の足下に広がり始めていた血の海を見てしまい、言葉が言えなかつた。

「若いのにやりやがるぜ、あと五十年もしたら我に勝てるかもしけなかつたがな」

忠勝は決して無傷で宗茂に勝利したわけではなかつた。

速さを生かして戦つていた宗茂であったが場数の違いが明らかに出てしまい、苦戦を強いられていたが、ノアが倒した機竜の亡骸やノアの武器の衝撃波などで地表にいる宗茂達は足場の悪い中、戦い続け、若い宗茂の思い切りの良さが忠勝に一撃を喰らわせる要因になつたのだ。

だが、忠勝はその上をいつていた。悲嘆の怠惰で抉られ斬られながら宗茂に重い一撃を放ち、彼の意識を失わせてしまつていた。

「……申し訳ありません」

と、ふと、俯いた闇に対して、忠勝は笑つた。

「ま、これも仕事だ。我が勝利したから、これから三河は消える。ただそれだけだ」

「……何故、地脈炉による三河の消失にそこまでこだわるのですか？」元信公は

「さつき殿が言つたろ？」“創世計画”つてやつだ。大罪武装を始めとする幾つもの教

材によつて解かれる“創世の試験問題”それにこの若も重要な存在だ

沈んでいるノアを指さして忠勝は言う。

「それよりも早く帰んな。我也歳だから疲れたわ」

やれやれだぜ、と一言愚痴をこぼした。

「立花・闇様、この老いぼれに戦う意思はないので、警戒しなくてもよろしいですよ」

鹿角の言葉に、ひでえな、と忠勝は苦笑いしていた。

闇はその言葉が本当だらうと信じ、宗茂とノアの身を両肩に担いで運ぶ準備をしていた。

「なあ」

忠勝の声が飛んだ。

「ここに来たの、アンタの独断か？」

「いえ、子供ではないので許可を取りました。——返事が来る前に来ましたけど」

両肩に二人を担ぎ終わり、この場を去ろうとする闇は再度忠勝達の方を向いた。

「ここで、——忠勝様達は中退ですね」

「勝ち逃げつて言わねえ？」

忠勝様がここで中退されても、せしゅう世襲のルールでがありますからね。宗茂様と、二代目の

忠勝様が戦われる機会はあるかと思います」

「……ずいぶんと負けず嫌いだな」

「当然です。夫、立花・宗茂は西国最強でなければいけないので」と言つて、闇は一步下がつた。

「お、そうだ——」

忠勝が手にしていた蜻蛉切を闇に放り投げた。闇はノアを担いでいる方の義腕で受け取ると、眉を歪め

「これは——」

「再戦したいなら三河消失で吹つ飛ばしたら駄目だが、——大罪武装とまでいかずとも、神格武装だ。これくらい無くちやあ、そつちのボウズと対等の勝負になるめえよ」
T e s. と言つて、闇が一度蜻蛉切の重みを確かめるように握り直した。そして彼女

が一步下がり、そのまま二歩、三歩と行き、

「——よい再戦を」

言葉を最後に闇の姿が消えた。加速して、一気に距離を空けたのだった。

「さて」

忠勝は背後を振り向き、首元にいる鹿角を確かめ、新名古屋城にいる松平・元信の下に歩き始めた。

忠勝は歩きながら鹿角に話をする。血を垂らしながらも歩き続ける。

「なあ」

忠勝の言葉に鹿角は反応して言葉を待つた。

「二代のヤツ、若とちゃんと子作りすつかな?」

「……どん引きです」

「いやいや、最後ぐらい娘の心配ぐらいさせろよな」

「それでそういう言葉が出てくるのは可笑しいと思いますが?」

「だつて二代のヤツにそういう知識教えてないじやん」

「……」

二人とも珍しく息が合いため息を吐いた。

そして忠勝は無人の町を歩きながら群衆に向かつて一言。

「おい、先生よ、我にも酒くれよ」

離れた場所にいる元信に忠勝は言つた。

「あとであげるからお預けな、この後に存分に飲み明かそうよ」

忠勝の事を見て、笑みを浮かべて応えた元信。

「先生よ、我、中退だつてよ」

「安心しなさい。井伊と榎原もそんな感じだから」

「結局、残つたのは酒井の馬鹿だけかよ。——馬鹿のくせにいつも上手いことやりやがるな」

だよな、と元信が応えた。

「若のヤツ大丈夫だよな」

「大丈夫、大丈夫、なんだつて公主隠しから帰つてきたしね」

確かに、鼻で笑うように忠勝が応え、肩の力を抜いた。

「大罪武装という教材は準備して、撒いた、先生はこれぐらいしかしていないさあ」

満足した笑顔を浮かべて言つた元信。

「——はじめの一歩は先生とお前らだ。何より一番乗りという響きが良い——

元信はマイクを握り直し、そしてこう言つた。

「——これより授業を始めます！」

元信の言葉と同時に新名古屋城が爆発消失した。

爆発の光を正面に捉え、忠勝は笑っていた。

先に消失した元信を看取り、忠勝は笑っていた。

消える瞬間、元信が軽く手を振っていたのを忠勝は見たからだ。

「つたくよ、酒飲みたかつたぜ」

愚痴をこぼした忠勝。

「忠勝様……」

首元で黙つていた鹿角が声をかけてきた。

先程から発言していなかつたから停止したものかと思つていた忠勝であつた。

「どうした鹿角」

「最後なので、奥様の魂を御返ししようかと」

鹿角は忠勝の妻の指輪を魂にして作られた存在の自動人形であつた。

彼女の舌には青珠が埋め込まれており、それが鹿角の魂である。

鹿角は忠勝に舌を見せ、取れ、と言わんばかりに押し付けてきたが、
「いいぞ、別に。それよりも最後まで話に付き合えよ」

鹿角を魂を取ることはなかつた。

「女房の指輪を魂にしたら、……まあ口の悪さがそのままですよ」
言つて、忠勝は鹿角を抱き寄せた。

「だがよ、女房を近くに感じられた。感謝するぞ鹿角」

忠勝の言葉に鹿角が目を細め、小さく笑つた。

その笑みに忠勝は苦笑を返し、

「タイミング良過ぎるぞ、お前」

次の瞬間、その身と声も、等しく光に飲み込まれた。

そして三河は新名古屋城を中心として消滅した。

消滅に際して約直径十数キロに及ぶ爆発消失が起こり、遠く奥州、九州からも確認さ

れた。

爆風が三河付近三十キロ前後まで町の残骸などを辺りに飛散させた。

急な雨などの環境の変化も爆発によつて生じたが、明朝には回復していた。

三河消失の最善で戦つていた、西国無双”立花・宗茂”と武藏総長連合 副長兼全補佐”ノア”は、本多・忠勝に敗北し負傷して気絶してしまったが現場に駆けつけた”立花・闇”によつて回収され、三河を脱出し、怪我の治療と避難のために、三人は三征西班牙の警護艦に回収された。

治療中のノアは重症であつたが、命に別状がないものの意識を失つたまま目を覚まさないでいた。

そして翌明朝。各國が動き出し、武藏が緊張に包まれる中、三河に来訪している教皇総長インノケンティウスが、聖連の臨時代表として判断を下した。

三河という中東の貿易港を消失させた責任を松平家に追及するものであつた。
三河君主の子である自動人形の魂と同化した九つ目の大罪武装を奉還することで責任を取らせようということであつた。

方法は、彼女の魂を三征西班牙の審問艦にて分解し、大罪武装を取り出す。

自動人形は魂を壊されれば死ぬため、これは彼女の”自害”を意味していた。つまりホライゾンが死ぬということ。

そして三河の嫡女として認知された自動人形が、指導者である己の責任を引責自害として了承した。

自害執行予定時刻は本日の午後六時。

それが、自動人形となつたホライゾン・アリアダストの”自害”の時間であつた。

そして治療中の武藏アリアダスト教導院、総長連合 副長兼全補佐”ノア”に対しても判断が下されていた。

意識を取り戻し次第、事情聴取及び大罪武装級武装を聖連への献上、聖連への永久服従が下された。

ホライゾン・アリアダストと同様にノアは身柄を拘束されていた。

番外編

錢湯 1

ノアはよく向井・鈴の両親が営んでいる錢湯で働いていることが多い。そして今日もノアは錢湯で働いていた。

鈴の両親は共働きで鈴と過ごす時間が限られているの知つてるのでノアは両親の代わりに働いている。家族と過ごせる時間を少しでも長くするためにノアは一生懸命働いていた。そして何よりも最後には一人でのんびりと湯に浸かれるのを楽しみにしているので、辛いことなどなかつた。

ノアが働いていることもあつて、女性客などが多く訪れることが多くなり、錢湯も儲かつており日々歳であつた。勿論、鈴が働いているのを見る為に訪れる客もいるのだが。

そして今日もまた機会メンテナンス、掃除、準備を手際よくこなし、営業開始してからも、湯船の温度調整、番台に座り客への対応などをスムーズにこなし、捌していく。老

若男女一人一人にちゃんと挨拶をし、礼儀も正しく、疲れも見せず働くノアに好印象で銭湯に入り、去っていくお客様達。

こうして銭湯の仕事をしているノアであつた。

そして最後の客を見送つてからノアはようやく一息をついた。そしてお楽しみの湯に浸かり、疲れを取ることができる。鈴の両親からはちゃんと”了承”を貰つてるので合意の上である。

湯に浸かりながらゆつたりとしているノア。

だが、彼は一人ではなかつた。

「これは一体どういうことですか？」

ノアの言葉と一緒に湯に浸かっている三人が応えた。

「あらやだ、どういうことつて、一緒に入りたいから入つてあるんじやないの」梅組第二位の巨乳が返答する。

「わ、私は無理矢理連れて来られて、ですね」

梅組最大の巨乳が返答する。

「わ、たしは、お母さんとお父さん、が、労つて、来い、つて」

梅組のストッパーが返答する。

喜美、浅間、鈴の三人がノアと一緒に入浴している。ノアが、かかり湯をして、一旦湯船に浸かり、体が十分に温まつてから体を洗おうとしていたら、三人が入ってきて、ノアと同じように行動してから、一緒の湯船に入ってきたのであった。普通ならタオルで少しは胸辺りを隠しているはずなのに彼女らは手拭いだけを持つていただけで隠していないなかつた。

喜美と浅間は、さも当然のようにノアの横におり、これでもかとノアの腕に胸を押しつけて、鈴は大胆にもノアに背中を預けて彼の股座に座つていたのだ。男なら誰もが羨む状況であつた。

「一緒に入りたいつことは分かりました。で、喜美、アレはなんですか？」

なつてしまつたことは仕方がない、と自分に無理矢理納得させ、ノアは次の質問をした。喜美が入つてきた時に持つていた物についてだ。

「何つて見ればわかるでしょう。エアマットとローションよ」

何かおかしいのかしら？」と言わんばかりの表情でいる喜美。

「わ、私は止めたんですよ！」でも喜美が「あらー、「マツト○レイですね」って興奮気味に言っていたのは誰かしらねー？」ああああ、ち、違うんですよ」

落ち着かない浅間は、言葉を述べている途中で喜美に割り込まれ、言い逃れができないくなってしまった。とんだドスケベ巫女だ。

「こ、こ、これには、深い理由がありまして、ね「知的欲求よね」そうです、知りたいと思つた私が居たんです！って喜美、また何を言わせるんですかッ！」

「智……自爆しているよ」

あうあ、と顔を真つ赤にさせて顔の半分を湯につけて、ブクブクしている智であつた。「ノア、くん、温まつた、から、体、洗おう」

相変わらず普段通りのペースでいる鈴にノアはホツとしていた。

鈴とノアは体が温まり、次に頭と体を洗う為に一時湯船から出ていた。二人はこうして出ていた中、問題の二人はどうちがノアの前を洗うかで少し揉めていた。

「鈴さん、痒いところない？」

「うん、だい、じょうぶ、だよ」

鈴の髪をノアが優しく洗つていた。シャンプーで泡立てながら指の腹を使つてマツ

サージをするように洗つていく。

気持ちよさそうにほっこりした表情でいる鈴。

「流すよ」

「うん」

熱めのお湯で、地肌をマッサージするように流していく。
そして次に体を洗うのであつた。

「ノア、くん」

「ん、何ですか?」

もじもじしながら鈴がノアに述べた。

「体、洗つて」

「……前もですか?」

「うん」

頬を赤く染めて言つてきた鈴は可愛かつた。

鈴の頼みを拒否する選択肢などノアにはなかつた。

ボディタオルで、首、腕、わきの下、胸、背中、ヘソ、脚の付け根、足の指の間、全てを洗い尽くすノア。

洗つている最中は、鈴の甘い声がノアの耳に印象強く残っていた。んつ、ふああ、

ひやあ、あう、などなど。

最後に体についた泡をしつかりと洗い流した。

「あの、ねえ、ノア、くん」

「ん、何ですか鈴さん?」

洗い終わり、綺麗さっぱりの鈴はノアにあるお願ひをする。

「わ、わたし、が、きょう、は、ノア、くん、のこと、洗うね」

「髪も?」

「うん」

「体も?」

「うん」

照れながらも返事をしてくる鈴にノアは可愛いと思つてしまつっていた。

「じゃあ、お願ひします」

「うん!」

ノアは鈴の前に座ると鈴が届く位置に頭を置いてあげていた。

ノアの気遣いに気付きながら、鈴は一生懸命やるぞ、と小さく手を握り締めていた。鈴は小さな手で一生懸命にノアの髪を洗い始めた。シャンプーで泡立つた泡が鼻についても気にせず洗い尽くしていた。

「かゆい、とこ、ろ、ない？」

「少し後ろ髪の部分が」

「ここ？」

「そこです」

「うん、がんば、る、ね」

ゴシゴシ、一生懸命してくれている鈴にノアは胸がぽかぽかする気持ちで一杯だつた。

「ん、じや、ながす、ね」

「はい、お願ひします」

ノアがやつていたように熱めのお湯で、地肌をマッサージするように流していく。

綺麗に洗い流すと次に鈴はボディタオルでノアの身体を洗おうとしていた。

泡立てながら、首元、背中、右腕、左腕、胸板など徐々に下向かつて洗つていった。

丁寧に洗つてくれているのでノアは、この時点では物凄い満足していた。

そして股の部分に到達したときの鈴の発言。

「やつぱ、り、大きい、ね」

「す、鈴さん」

男性の大事な場所も恥ずかしがりながらも頬を染めて洗つてくれていた。

全てを洗うと、最後は身体に付いた泡を洗い流してくれた。綺麗になつた二人はまた湯船に肩まで浸かつていて。

勿論、鈴のいる場所はノアの股座であつた。

「ね、ねえ、ノア、くん」

「ん、はい、何ですか」

ゆつたりと浸かりながら静かな時を過ぎてしていく一人であつた。

「ず、ず、ずつと、いつしょ、だよ」

「」

ノアの方を向き、向かい合つたと思つたら鈴からの言葉に思わずときめいてしまつて言葉が出てこなかつたノア。

「ノ、ノア、くん？」

「はい、ずつと一緒にいましそうね」

「う、うん！」

そのまま二人はゆつたりと湯船に浸かりながら時を過ぎした。

鈴とノアのイチャイチャ空間を見ていた二人が居た。

「……」

静かにその光景を見ていた。

「喜美、私なんだかいけない気持ちになっちゃいそうです」

「アンタ 鈴にときめいて、レズなのかしら」

「違います、私はノアくん一筋です！」

「はいはい、分かつてるわよ、ノアはレズでも何でも喰つちゃうんだから」

「ん、喜美、何でもつて言いましたよね？」

「全くこのエロエロ巫女は何を妄想したのかしら」

「ちょ、エロエロなんかじやありません！」

「うるさいわよ、牛乳巫女が！」

「ちよつと喜美!? 牛でもないですし、それに私の胸を叩かないで下さいよ！」

「何よ、感じているくせに」

「ば、馬鹿言わないで下さい！ た、叩かれて感じるなんて、へ、変態です！」

「あら、アンタこの間、ノアにお尻叩かれて喜んでいなかつたかしら？」

「ふえいッ!? な、何言つてるんですか!!」

「甘い声で、もつともつと、とか言つていたような…?」

「そ、そんな、わけ「二人とも何を話してゐるの?」ノアくん、これも全てノアくんのせいですっ!!」

「浅間つたらノアに抱きついてマウントポジション取るなんてやるわね。でも、この私より先にするのは許さないわっ!!」

鈴がのぼせてしまいそうだったので先に上がらせ帰つて來たノア。

浅間の暴走によつて意味も分からずノアは襲われ、浅間と喜美に美味しく頂かれました。